

THE DIVINE LIFE

クリエーション

宮崎虎之助著

CREATION

BY PROPHET

268
492

特 18
469

THE DIVINE LIFE

ク
リ
エ
ー
シ
ヨ
ン

CREATION

明治
44. 11. 6
寄贈

宮崎虎之助寄贈本

18
469

皆様へ申上ます

現代は、煩悶、懷疑の暗黒時代であります、古來、未だ曾て有らざる空前の懷疑、煩悶に陥つた時代であります。

されば豫言者は、赫々たる光明を投ぜんが爲に、未曾有の大命と、偉任を負ふて現はれ給ひました。

(一)
猛火の如き豫言者が、白熱の状態にあつて時々ものせられた一端が、この新福音であります、齋らせ給ふ救済の妙諦が、略ぼこの中に伺はれるのであります、今此クリエーションの發行に際し、皆様へ申上げたものは、朝夕座右に供へられまして、福音を讀むので

(二) なく、之を味ひたまへ、おのが血と肉とに喰ひ給へ。

明治四十四年十月

光子

クリエーション

目次

(一)

| | | |
|-----|-----------|----|
| 第壹章 | 宣言 | 一 |
| 第貳章 | 豫言者 | 五 |
| 第參章 | クリエーション | 一四 |
| 第四章 | 罪惡の深義 | 二〇 |
| 第五章 | 肉神 | 二七 |
| 第六章 | 宇宙と自我 | 三八 |
| 第七章 | 神の生活と道德 | 四三 |
| 第八章 | 靈魂及び未來と自我 | 五二 |
| 第九章 | デヴァイン、ライフ | 六五 |

(二)

第十章 祈禱、冥想、禪、反省、修養、自力、他力……………八七
第十一章 新宗教と神……………九四

新宗教と神
祈禱、冥想、禪
反省、修養
自力、他力

クリエーション

宮崎虎之助 著

第一章 宣言

我宮崎虎之助は豫言者であります。廿世紀以後に對する心靈界の根本革命を行ふために現はれたのであります。この嵩高絶大の任命は天籟の自覺より來たのであります。それ故に耶蘇教の方から申すればメシヤでありまして、佛教の方から申すれば佛陀であります、則ち宮崎虎之助はメシヤブタであります。古へより今日に至りまして、世界に於て三大豫言者が現はれたのであります、第一豫言者は釋迦牟尼でありまして印度に現はれ、第二豫言者は耶蘇基督でありまして猶太に現はれました。第三の豫言者は廿世紀の今日に於て我大日本に現はれたのであります、取も直さずメシヤブタは則ちそれでありませぬ。

(一)

(二)

三大豫言者が、いづれも共に泰東に於て現はれましたのは記憶すべき事實であります。第一豫言者釋迦牟尼によりて成立しました佛教も、第二豫言者耶蘇基督によりて成り立ちました耶蘇教も、共に孰れも完全きものではありません。今日の状態は佛教も耶蘇教も共に生命がない、活力がない、腐敗の極に達した偽善虚偽です、到底將來の宗教界を支配し、萬民の心靈を救済することは出来ません、是に於て第三豫言者が出現したる所以であります。メシヤブタは宗教の王であります、神であります。神の事實であります。我が齋らせる『我神』の新福音に依りて、始めて宇内の心靈が救済を得るのであります。第三豫言者に至りて、世界的大宗教が完美を悉くするのであります。

諸君、この絶對の宣言に對して、諸君は如何に思はれるのであるか、狂暴不稽の嘖語として冷笑馬風視するのであるか、諸君、見玉へ、古來の豫言者は皆な狂暴視せられたでないか、嘲哂されたでないか、釋迦牟尼然り、耶蘇基督最も然りである。ヨシ諸君は我を嘲哂し、迫害し、遂に十字架上に釘けて無殘の最後を遂ぐるに至る

も、我がこの絶對の宣言は、宇宙の一大事實である、無限大の靈界に震動し、無限大の宇宙に磅礴するのである。獨り空間的のみならず時間的に於て、永遠無究に活存するのである。諸君は歴史上に於て、屢々豫言者を見たであらふ、マホメットと云はず、モーゼスと云はず、或は釋迦牟尼、或は耶蘇基督、是等の豫言者を追懷羨仰するのであるか。諸君、釋迦牟尼を見んと思はば、メシヤブタを見玉へ、耶蘇基督に聞んと思はば、メシヤブタに聞玉へ、我こそは釋迦牟尼以上、耶蘇基督以上の豫言者である、我がこの自覺と自任は、太陽の赫々と同一である。たとひ世界は微塵に崩るゝとも、我がこの絶對の宣言は、確乎として、嚴乎として、宇宙と共に不拔である。諸君、まのあたり豫言者を目撃するは、諸君の光榮である、身親しく豫言者に聞くは、諸君の幸福である。

(三)

我は吼へんがために現はれたのである、我は噛まんがために現はれたのである、我は嘲哂されんがために生れたのである、我は血を流んが爲めに生れたのである、諸君、我を冷笑するか、汝の笑は禍なり、板を鋸る大工職、半纏股引の耶蘇基督を笑

(四)

ふのである、我を嘲哂するか、汝の嘲りは禍なり、駱駝を牽し旅商人、紺足袋草鞋のマホメットを嘲るのである。豫言者を見ざる汝の目は、抉て棄てよ、我に聞かざる汝の耳は、剪て棄てよ、嗚呼禍なる世なる哉。凡そ豫言者を嘲笑し、迫害するのは、古往今來、其軌を一にするのである。劍の影に豫言者あるは、實に宇宙の公開的神秘にして幽妙の極である。諸君の中若し一人だにも、この神秘の金線に觸るゝを得んか、忽ち豫言者の榮光を見て、直ちに信仰を得るのである。

第貳章 豫言者

或人問ふ、私は種々疑問もありますけれども、第一の疑問は人生問題であります、次に宗教についても解からぬ所がありますから、追々御尋ね申しやぶが、先決問題として、先生が豫言者であるといふことを確めたいのでございます、先生が豫言者であることは、私には何うしても信ぜられません、先生は如何にして其自信を得られたのでありませうか、それが御聞き申したいのであります。

私を豫言者として信せられぬとまうされますか、君は當代を豫言者出現の時代とは思ひませんが、思ひますならば、その豫言者は、則ち宮崎虎之助であります、古來から豫言者は容易に信せられないばかりか、甚しきは嘲笑され、迫害されるのであります、豫言者と迫害とは、例へば形と影と相伴ふ様なものとも云へませう、耶穌も豫言者は故郷に尊ばれずと申したが、實は故郷ばかりではありません、足跡の及ばん限り、至る所皆な惡まれ、嘲けられるのであります、耶穌が曾てエルサレムの神殿で叫びました演説は、まことに痛切ではありませんか、豫言者の迫害についての悲憤は、忽にして劍光、忽にして血火です。

(五)

(六)

噫なんぢら禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、なんぢら白く塗たる墓に似たり、外は美しく見れども、内は骸骨と諸の汚穢にて充つ、此の如く、なんぢらもまた外は饒く人に見れども、内は偽善と不法にて充つ、噫なんぢら禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、なんぢら豫言者の墓をたて、義人の碑を飾り、又いふ、我侪もし先祖の時にあらば、豫言者の血を流すことに與せざりしを、然ばなんぢらは、豫言者を殺し、者の裔なることを自ら證す、なんぢら先祖の墓を充せ、蛇虺の類よ、なんぢらいかで地獄の刑罰を免れんや、是故に、なんぢらに豫言者と智者と學者を遣さんに、或は之を殺し、又十字架に釘、或は其會堂にて之を鞭ち、或は邑より邑へ逐苦めん、そは饒なるアベルの血より、殿と祭の壇の間に、なんぢらが殺し、ペロキアの子ザカリアの血に至るまで、地に流したる義人の血は凡てなんぢらに報來らんか爲なり、われ誠になんぢらに告ん、此事みな此代に報來るべし、噫エルサレムよエルサレムよ、豫言者を殺し、爾に遣さるゝ者を石にて撃者よ、母鶏の雛を翼の下に集る如く、我なんぢの赤子を集めんとせしこと幾次ぞや、されどなんぢらは好ざりき、見よ、なんぢらの家は荒地となりて遣れん、われなんぢらに告ん、主の名に託て來る者は福なりと、なんぢらの云んとき至るまでは、今より我を見ざるべし。(馬太二十三章自廿七節至卅九節)

是は曾て讀んだこともありましたが、幾度見ても新しく讀まれます、豫言者は故郷に尊ばれぬといふことも、兼て承知して居ますし、且つ豫言者出現の時とも思いますが、先生が當代の豫言者であるといふことは、どうも信じ兼ねます、何時か一寸新聞で拜見しましたが、靈南坂の教會堂で、先生が小崎牧師に向つて傳道を試みられ、豫言者の宣言をなされたとき、小崎牧師は發狂者よと罵り、信徒の青年は、暴力を以て、集つて群つて先生を會堂から引ずり出して、門前の大道に突倒したそうではありませんか、其時には別に御演説もなさいませんでしたか。

已むを得ず會堂の門前に立ちまして説教を初めました、丁度教會も終ひまして、男

女の信徒は會堂から出て參りましたから。

『汝等は聖書の上に於て、舊約時代より以來新約時代に至るまで、アブラハム、モーゼを始め、ダビテ、ソロモン、イザヤ、エリヤより、バプテスマのヨハネ、イエスキリスト等の多くの豫言者の輩出を見、且つ之を信じて其教訓を守り、新舊兩約は、天啓の經典として信仰しつゝあるではないか、苟も豫言者の出現を信ずるの信仰あらば、今日豫言者の出現は、汝等の幸福でないか、それに何んぞや、目前自ら宣言をする現代の豫言者を拒まんとするか、目あるものは見、耳あるものは聞け、汝等は曾て汝等の主と呼ぶ豫言者耶蘇を石にて撃ち、棘の冠を冠らせ、十字架に釘て殺したるパリサイの學者等について讀まないか、汝等こそはパリサイの裔であるまた「我なんぢらに豫言者を遣さんに、或は之を殺し又十字架に釘け、或は其會堂にて之を鞭ち、或は邑より邑に逐苦めん、そは義なるアベルの血より殿と祭の壇の間に、なんぢらが殺しバラキアの子ザカリアの血に至るまで、地に流したる義人の血は凡てなんぢらに報來らんが爲也」とあるを讀まないか、汝等こそは、舊約以

(七)

(八)

來、凡ての豫言者を苦めたる蝮と蛇との後裔である、ア、禍なる哉、汝等は云ふてあるふ、我輩もし豫言者耶蘇の時代に居つたならば、耶蘇の弟子となつて耶蘇に従ひ、パリサイの仲間には反對したのであるふと、亡びの子等よ、汝等まのあたり豫言者を見ながら、之を信ずることが出来ないで何うして耶蘇を見て信ずることが出来るやうか、この豫言者を見て排斥するからは、耶蘇を見て排斥するに決つて居る。耶蘇は、後世更に再臨すべしと豫言して居るではないか、宮崎虎之助は則ち耶蘇の再臨である、メシヤである、佛陀である、汝等は、古へ猶太人が耶蘇を苦めたる如く、今また我を苦めんとするか、パリサイの徒たらんとするのであるか、耶蘇を信するの信あらば、宮崎虎之助を信せよ、我は心靈救済のために現はれた宗教の王である、耶蘇基督以上の豫言者である、目あるものは見、耳あるものは聴け、神は外にあらずして内にある、人々の心靈は神である『我神』である『我神』は目に見へない耳に聞へない神ではない肉體の神である、宮崎虎之助は其事實である、此の豫言者を見るのは則ち神を見るのである、汝等は水のバプテスマを願ふのであるか、我

が與ふるバプテスマは血である、然らば汝等悔ひ改めて我を信せよ、破れたる靴は拔棄して、心を新たにして我に歸せよ、然らば永遠の生命を得るのである』と云ふのであります。

或日の日曜禮拜の朝、本郷會堂を見舞ひました、丁度海老名彈正が神に祈禱を始めたところであります、講壇に手をつけて頭を垂れ、頻りと様々の事をいふて願つたり、訴へたり、禱つたりして居ます、之を目撃した私は堪へられなくなつた、講壇近く進んで大喝をした『海老名、如何に御祈禱したからとて、何の役にも立つものでない、我以外に神が居ると思ふは迷信だ、天の神に祈禱する位なら、この豫言者に祈禱するがよろしい、神様は天には居ない、今此處に立つて居るんだ』と叫んだところが、門弟加藤直士躍りかゝつて豫言者を會堂の門外に突出しました。

(九)

これも日曜午前の禮拜の時でありました、富士見町教會に於て植村正久がオ、神よと例の如く禮拜の祈禱を始めました、豫言者は壇上に突進して、これを捕へ『御祈禱は止めろ、天の神に祈禱をする奴があるか、祈禱は迷妄だ、偽善だ、虚偽だ、神

(〇一)

は天に在らず心に在る、人々の心が即ち神である、天に祈るのは心の神を放逐するのだ、祈禱は斷然廢す可し、我は宗教革命の任を負ふ豫言者である』と呼はつた、信徒の青年駆け上つて、私の腕をねぢあげ、講壇から引摺り降して、會堂外に攫み出しました。

會てユニテリアン教會の監督をして居た神田佐一郎といふのは、宗教界に稀に見る偽善者でありました、こんな奴が宗教界に跋扈して居るとは、奇怪千萬でありますから、一日ユニテリアン教會の禮拜に臨みまして讚美歌が終つてから、豫言者は壇上に飛びあがつて、大喝一聲、神田を面譴した『宗教を弄んで神明を賣る偽善者、宗教の賊、神聖を汚す惡魔、聽衆諸君はこんな奴の會堂に集るてない、直に解散す可し』と嚴命した、偽善者神田は戰慄して恐れ入つた、程もなくユニテリアンを退會して宗教界から出て終ひました。

京橋區月島二號地、月島の地たる東京灣中に築かれ、田舎の趣をなす、富岳は聳へて白虎の如く、房總は横りて蒼龍に似たり、日没して天色漸く黒み、三五の銀星光を磨するや、浪は颯りて魚躍らず、芝高輪の森は、忽にして山となり、七つの砲臺は、忽にして島となる、歸帆鳥の如く浮み、出沒數ふべし、既にしてダイヤナ東天に歩むや、萬星醜を掩ふて遁れ、江山、また地上の江山にあらず、靈氣は虹の如く垂れて我を圍み、心機煥然、榮光日の如し、クリスト山上の變貌は、我身に行はれ菩提樹下の大悟は、我心に開く、時に明治卅六年十一月五日（九月月明）の夜でありました、天來の直覺に依りて、絶對生命を靈覺したのであります、絶對生命を靈覺するや、油然として豫言者の自覺を得たのであります、其消息は到底言語を以て説明することは出来ませぬ、所謂以心傳心の外に出ることを得ないと思ふ、漸く人々が私を豫言者として信するに至りました事實が、則ち豫言者の具象的發展であります。

君にして切に有ゆる宗教道德の頹敗を慨かれますならば、之が救濟の任命を帯びた豫言者の出現を希求されますのは、自然の精神でありませう、この萬民の希求心に應じて出現しましたのが、即ちこの豫言者であります。

(一)

(一)

その靈覺の大意を申しますならば、『神の生活の開闢』であります、『神の生活の創造』であります、即ち『神生クリエーション』であります。

○神の生活とは、新人生の創造であります。新人生は、即ち神の生活を営むのであります、人間が神々となるのであります。

○神の生活を営む以上は、既に人生でない、神生である。茲に神生を創立し、神生の紀元を開くのであります。

○我(自我)といふ我は、取も直さず神であります、神(絶対)といふ神は、取も直さず我であります、これを名けて我神われがみと申します。

○この我神の、啓展成就に努力するのが、即ち神の生活であります。

○人間といふ動物のまゝで、生活するほどならば、人間も、天地も、存在の必要はない、今直ぐと滅亡した方が増してあります。

○天地と宇宙の存在する譯は、人間が神となる爲であります、猿から進化して來た人間が、更に神に進化するのには、宇宙の約束であります、人間が神となつてこそ

天地も宇宙も、始めて存在の意義があるのであります。

○人間の心(自我)は、本來からして神であるから、神の生活を営むのが當前であります、その力からやんと自我の内に具はつて居るのであります。

○いかに生きるが神の生活でありますか、曰く、神格の創造であります。

○我は、本來からの神であるが、その神は、未だ實生活の上に現はれて居ない、その神が、實生活に現はれて始めて神格となるのであります、そこで神格は、各々が、個性／＼の内から造つて行かねばならぬ、創造するのであります。

○神格は、口に言へない唯もう崇嚴である、ザプライムといふより外に言葉がない

○宇宙は、我の一部に過ぎないから、天地も、自然も、我神の啓展成就するにつれ愈々その價值と意義とが開かれ造られて來るのであります。

○神の生活に入ると、性慾も肉性もその儘に、神の生活に缺く可らざる食糧となつて、犯す可らざる神聖の意義を生ずるのであります。

(三一)

第參章 クリエーション

或人曰く、創造と申しますると、ヘブライの思想でありまして、古來他の國には無かつたヘブライ特有の思想でありますし、また創造とは無から有を生ずる意味となつて居まして、如何にも無理な考へをもたしめる様な心持もありますし、餘りに超絶な御命名で、世人は驚くの外ありませんが、そこが反つて眞理の存する所でありませうか、御靈覺の内容を委はしく拜聴致とう存じます。

クリエーションの原意は、無から有を生ずるとか、神が天地を造つたとか、そういう意味に用いられた言葉でありますけれど、そんな原意をその儘に採つた譯ではありませぬ。

茲に神生クリエーションと申しますのは、新天地開闢の意味で、新人生の創造、神の生活、即ち神生の創立紀元を意味するものであります。

人間が神となる事は、不可能であるとか、神とならぬでも人間で澤山であるとか、様々な非難をいふ人もありますが、人間が神々となることは、宇宙の約束であります、猿猴から進化して來た人間は、更に神々に進化する筈であります。

我々の自我は、本來からして神であります、我々の自我は、絶対者であります、自我の外に、絶対があるのではありませぬ、自我そのものが即ち絶対實在であります。從來は、神は人格的であるとか、人格的に映じた實在が神であるとか、神に冠するに人格を以てしたものでありましたが、實は人に冠するに、神格を以てす可きものであります、神生クリエーションは、神格を宣べ傳ふるのであります、神は人格的といふてない、人は神格であると云はねばなりません、神格が發揮し、啓展し、開發するのが神の生活であります、さればクリエーションの意義を一層詳かに申しますならば。

クリエーションと申しますと、御話のやうに無から有を生ずる意味だから、創世の始めに造物者が、何者もない處から、天地萬物を造つたやうに、神生のクリエーションとは、宇宙に無い神を、新に造り出す事であらうか、無始久遠の神を認めぬてあらうか、絶対は否定するであらうか、或は絶対を如何に見るであらうかと疑問を狭む人が往々にあります。

(六一)

無始久遠の神、即ち絶對を認めなければ、宗教道德は申すまでもなく、人生そのものが立ち行きませぬ、人生の意義は、全然無くなつて了ふのであります、無始無終の神、久遠切在の神なればこそ、その神の生活を營む可く教を立てられたものであります。

されば無始久遠の神、即ち絶對は、これを何處に認むるであらうか、自我の根柢は、取りも直さず無始久遠の神であります、無始久遠の神は即ち自我であります、自我は絶對であります、實在であります、自我の外に、絶對も實在もない、絶對と實在とは自我それ自身であります、されば絶對者なる、無始久遠の神なる自我であれば、何を苦んで神生をクリエーションする必要があらう、クリエーションとは、何の必要あつて唱ふかと、こは一應尤もな質疑であります、是が意義を宣明する事は取も直さず救済の第一義に属する者であります、自我は、本來からして神でありますけれど、生民あつて以來その神が、未だ實生活の上に顯現されて居ませぬ、また其神は無限でありますから、實生活の上に顯現されるにも無限の顯現であります、限り

なく高い、限りなく大い、限りなく深い、限りなく遠い顯現であります、その無限の顯現は、今から始めて、取りかゝるので、これまでは顯現されて居なかつたものであります、是が實生活の上に顯現される場合には、個々別々の個人性を備へた自我の顯現でありますから、人々に依つて様々なる形を以て現はるのであります、所謂十人十色で神々が各々異彩を放つものであります。

これが機械か何かならば、單に顯現するとか開顯するとか云へば足りませぬけれど、なほ今日までの人間の動物的生活の有様から云へば、開顯位の處で足りませぬけれども、苟も人々が本然に自覺をして、神の生活を營むからには、其自我の本來を開顯するには、個人個人の努力を待つて、個人々の特能を揮つて、始めて啓展するのでありますから、豫言者は、之を稱して創造と申します、創造と稱するより外に言葉がない、また創造といふ言葉も、この意義を表はすより割切なものはありません、各々神々をクリエートする、自ら神を造つて行くのであります、神の生活のクリエーションであります、基督が基督的に、釋尊が釋尊的に造つた如く、各々は各

(七一)

(八一)

々の個性のまゝに、基督、釋尊よりも更に大なる、遙に優つたものを造らなければならぬのであります。

されば神の生活とは、如何なる生活であるか、如何なるが果して神の生活でありませうか。

各々が、自己銘々の努力に依つて、自己特得の性能に依つて、オリヂナルに獨創的に、それ／＼に神々を造つて行くのでありますから、こうである、あゝでなければならぬなど云ふべきものではありません、が約して一言に申しますならば、神格の創造であります、神格創造の生活でなければならぬ、神格とは如何なるものでありませうか、言はんとして言ひがたい、離言不可説であります、恰も美といふことが言はれぬやうに、味ひといふとが言はれぬやうなものであります、言はれぬけれども是ほど確かな事實はありませぬ、何となれば、自我は、本來からして神である、自ら神の自覺の上に生活する行動一切の事實であります、一擧手一投足も、直に神格の創造であるからであります。

己むを得ず、強いて申しますならば、一語、唯一語、即ち崇嚴といふより外に言ひ様はない、サブライムであります、崇嚴の品格、是が即ち神格であります。サブライム、崇嚴といふ中には、愛も、誠も、勇も、さらに眞も、美も、善も、悉く諧調を整へたる音樂の妙韻であります。

(九一)

第四章 罪惡の眞義

或人問ふ、

佛教に、罪惡深重、煩惱具足とありますが、自ら省みますと、如何にも我が身の不淨が見へすきまして、考ふれば考ふるほど、不孝不悌の凡夫身が自覺されます、それが耻かしくもあり、また自ら悲まざるを得ぬのであります、自我の創造、即ちクリエーションに對しましては、この煩惱といひ、罪惡と申しますのは、如何に處置すべきものでありませうか、神の自覺とは、正反對の事實のやうに感ぜられます、この神に對する惡覺と申すべき煩惱罪惡の爲に、神の自覺は、到底開けきれないやうな強い退轉を感じますのであります、願くは罪惡の消滅に就て教へを仰ぎたく存じます。

豫言者曰く、釋尊は、肉身のまゝ久遠の如來であり、イエスは、一本工のまゝ久遠の基督であります、この處は、實に宗教上の極致でありまして、人々は誰れしも皆悉く此境地に到らなければなりません、此境地があつてこそ、始めて人生の意義もあるのであります。

久遠の如來が極樂淨土に居づくまつて居ましては、何等の意義もあるものでありませぬ、久遠の基督が、天國に閉ぢこもつて居ましては、何等の價值もないのであります、肉身の釋迦となつた如來、木工となつた基督、こゝに始めて意義があります

肉身の釋迦が、そのまゝ久遠の如來となりました、木工の耶蘇が、其まゝに久遠の基督となりました、こゝに始めて價值があるのであります。

釋尊や耶蘇は、如何にして肉身のまゝ、木工のまゝ久遠の如來となり、久遠の基督となつたのでありませうか、唯彼等は、本來の面目を心から承知したからであります、自覺が開いたからであります、本來の面目を承知したならば、本統に自覺が開いたならば、其本來の面目を發揮せずには居られませぬ、自覺を成就する爲に、努力せずには居られませぬ。

この努力が、大切な事でありまして、この努力に依つて木工の耶蘇は、そのまゝ久遠の基督となり、肉身の釋迦は、そのまゝ久遠の如來となつたのであります。

豫言者は、この努力を名けて創造と申します、佛教にて開顯など申しますけれども花の咲くやうな、水の流るゝやうな、雲の行くやうな、何か自然界の作用のやうに聽へまして、聊かも努力の意義がありません、殊に個性の發揮といふ、最も大切な意義が無視せられて居るのであります、耶蘇は、個性のまゝ耶蘇基督を創造し、

(二)

釋迦は個性のまゝ釋迦如來を創造しました、耶蘇は、どこまでも耶蘇的基督であります、釋迦は、どこまでも釋迦的如來であります、茲に創造的努力の意義が存するのであります、たゞ覺つた許りでは、その覺りに價值がありません、顧らく其自覺の上に創造の努力を積まねばなりません、又、單に努力ばかりしたところで、根本的自覺、本來の面目の承知が出来なければ、其努力は、何の役にも立ちませぬ、例へば基督の十字架にしましても、唯十字架の上に死ぬるばかりの事ならば、何等の價值もありません、權助も猶能く頸をくゝるのであります、お鍋すら血を流す場合があります、基督の死の尊ひ譯は、彼の自覺が尊ひからであります、彼が神の子たる自覺の爲に、血を流した、其血が尊ひのは、自覺の尊ひのであります、お鍋の血も、血に變りはありませんが、その血の價值に至つては、ゼロであります、それはお鍋には尊ひ自覺がないからであります、されば、本來の自覺と、創造の努力と相待つて、茲に始めて久遠の基督と如來とが成就するのであります。

基督や釋尊の自覺といふのは、我神的の自覺でありました、この自覺があればこそ久遠の如來とも、久遠の基督ともなつたのであります、君は、過去劫來の凡夫身、罪惡深重、煩惱具足、不孝不悌の凡夫身也と申さるゝが、凡夫身の方から云へば、釋迦も基督も、矢張り同じく凡夫身でありました、君より反て遙に煩惱が強烈でありました、基督の四十日四十夜の試み、釋尊が降魔に於ける苦悶、なかくに普通の貧弱なケチな煩惱ではなかつた、けれども彼等は、その凡夫身の奥底から、雲の岫を出づるが如く、我神的の自覺が開きました、そこで彼等は凡夫身など考ふる暇はありません、一心三昧に、この自覺の成就の爲に、創造の努力をしました、而して煩惱ながらに煩惱を菩提となし、肉身ながらに肉身を如來としたのであります。彼等の尊ひのは、凡夫身でありながら基督を造り、肉身でありながら如來を造つた點であります、煩惱を以て菩提と造し、肉身を以て如來と造し、木工を以て基督と造すほど、是ほど大なる創造はないのであります。

(三二)

この創造をなす力があればこそ、人生の價值はあります、人が神となる、

(四二)

是が人生の意義であります、人が神とならぬ位なら、人生の意義は消滅であります。君は、煩惱の凡夫身であるから、神の自覚には位れぬやうに申さるゝが、例へば人の肉身は、獸類と同じであるから、人とは云へぬと申しますならば、可笑しなことになりません。人の肉身こそ、獸類と同じであつても、心が人であるなら、矢張り人といはねばなりません。其如く、煩惱は具足して居ても、其心に神の自覚が開いたならば、其人は既に神であります、神であるからこそ、久遠の如來とも、久遠の基督ともなれたのであります、煩惱が具足して居れば、神の自覚に位れぬとしたらば、釋迦も耶蘇も永劫に成佛することは出来ませぬ、久遠の如來も、久遠の基督もあつたものではありませぬ。

由來煩惱も罪惡も、神の自覚を開くに就いては聊かも障害となる可きものではありません、人間が、獸類と同じ肉體を持つて居たからとて、人として少しも妨げないと同様に、煩惱罪惡があつたからとて、神の自覚に妨げとなるものではありませぬ。煩惱罪惡に妨げらるる程の自覚ならば、何の役にも立たぬ、そんな自覚は自覚ではありませぬ。

煩惱罪惡であればこそ、神の自覚が必要であります、煩惱も罪惡もありませんならば、神の自覚の必要はありません、されば煩惱罪惡は、人が神となる必須要件と申す可きであります。

煩惱罪惡があればこそ、始めて自ら神を創造するの價值が生ずるのであります、君は、罪惡深重、煩惱具足の凡夫身也、耻づべし悲むべしと申さるゝが、煩惱罪惡は耻づ可く悲む可き者ではありません、正に神の創造に缺く可らざる材料であります。神の成長に缺く可らざる滋養物であります、罪惡が深重なれば深重なるほど、煩惱が具足すれば具足するほど、愈々努力の勇を増して、愈々創造の價值が増すのであります、若しそれ木工の耶蘇にして、初めから罪惡もなく、煩惱もなかつたならばたとひ彼が久遠の基督となつたとて、何等の價值もないのであります、肉身の釋迦に於ても同じ譯であります、此の間の消息が解らなければ、いつまで経つても覺りが開ける筈はありません。

(五二)

(六二)

最後に曰く、創造の努力を怖るゝ者は、豫言者の徒ではありませぬ、神となるには血の河を渡らねばなりませぬ、血の河を怖るゝ者は動物であります、血の河は、正に動物と神とを判つたのであります、この血の河を命名して、クリエーションと稱するのであります。

第五章 肉 神

或人問ふ、私は家庭の不幸のために、非常に煩悶して居るものでございます、私共は三人の兄弟でございますが、姉は數年來、世にも忌はしい天刑病にかかりまして、世を慕ひ、人を避けまして、田舎の海邊に隠遁して居ります、更に不憫にも春秋に富める弟が、またもや癩病に犯されまして、姉と一處に淋しき月日を送りつゝあるのでございます、私は其兄弟として、實に云ふに云はれぬ苦みでございます、宗教より外に、慰めを得られるものはないと思ひまして、基督教も聴きましたし、佛教にも聴て見ましたが、何の慰安も得られませんで、苦痛煩悶は依然であります、基督教の神様も、佛教の因縁も、私如き不孝の者には何の役にも立ちませぬ、殊に基督教の所謂天の父があると云ふことは、如何に考へましても信ぜられませぬ、天の父は愛の神様であつて、平等博愛である、其生きたまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し玉ふ神である、眞心を以てさへ祈禱をすれば聽上げて下さる神であると申しますが、斯の如き慈愛の神様があらうとは、何によりまして信じ得られますのでせうか、私の如き悲慘の境遇にありますものには、かゝる慈愛の神様はとも見出されませぬ、残忍なる無慈悲なる、悪魔の存在を信することは寧ろ容易であります、哀む者は福なり、其人は安慰を得べければなりと聖書中に見へますが、安慰どころではございませぬ、私には天の父が怒られます、流石のキリストも十字架の上にては、神よ神よ何ぞ我を捨て玉ふやと叫びまして、怨みを言れたそりでありますが、私の目には、天の父が悪魔に見へます、残酷なる繼父に見へます、残酷なる繼父は、他人よりも遙かに悪いのでございます、キリストの有名なる山上の垂訓も、哀む者は不幸なり、其人は安慰を得ざればなりといふ事になります、先生の御説きになる我神は、如何なる神でございませうか、先生の新福音によりまして、安慰を得たい者と存じます。

(七二)

君の悲惨なる境遇は、御察し申します、君の如き不幸の境遇にある人でなければ、宇宙も、人生も、其真相はなかく見へませぬ、容易に解るものではありません、例へばゴルキーの文學にしても、座上の空談とは異ひましてゴルキーでなければ書くことの出来ない、穿つたところがありましたてゴルキーの經歷境遇は、實にその文學であります、世の所謂文學者が、夢想だも出来ない悲惨の境遇を自ら通つたのであります、慘絶悽絶の境遇を、單に外から視察をして書いたのではありません、自から閱歷して書いたのでありますから、識見と云ひ、着眼と云ひ、奇抜であります、生命元氣があるのであります、君の目には天の父が惡魔に見へて天の父を怨むと云はれますのは、平凡なる耶蘇教徒の夢想も及ばぬところであります、君の如き人には、實に人生の真相が看破されまして、耶蘇教的有神論の迷妄にして、無意義なることが、明かに見へるのであります。

濃美震災の當時、耶蘇教も、佛教も、共に先を争ふて傳道に骨を折つたそうであります、耶蘇教の方は、新たに信者の殖へないどころか、反て是迄の信者も、信仰を

放棄したものが多かつた様に聞きました、耶蘇教徒は之を目して、如此冷酷の土地だから、神様が罰したのだと云つて居たそうであります、かゝる皮相の世界に呼吸しながら、安慰の中にあるやうに思ふて居るのは、禍なる哉です、一體耶蘇教徒が、御祈禱をしては神が聴上て呉れるやうに感じまして、神様が直接に人類の道徳に干渉し、人類の生活に干渉する如く思ふのは、古來の迷妄であります、如斯信仰は、太古野蠻の思想中にありましたもので、猶太の如きは、最も甚しいものがあります、豫言者耶蘇の如きも、矢張り其思想を脱却し得なかつたのであります、今なほ耶蘇教中に遺つて居るのであります。

畢竟するに、神は、内觀にあるものであります、主觀的であります、信仰の如きも内觀的に外ならぬのであります、耶蘇が申ました天の父も、佛教が唱へます彌陀も、實は『我』の本體であります、『眞の我』であります、『眞の我』は絶對であります、實在であります、我は『眞の我』より來る我であります、實は一體であります、一如であります、それ故に、我の中には、無限無究、或は、絶對の觀念が

あるのであります、この觀念は、空想ではありません、實在であります、故に之を稱して『我神』と申す、人々の心靈は、直に神であります『我神』であります、

『我神』は肉體其まの神、肉體ながらの神、即ち『肉神』であります。

『我神』は小さな五尺の身體に宿りまして、有限界、物質界に制限される様に思はれますけれども、實は有限、物質を超越して居るのであります、それ故に、一たび『我神』と意識すれば、直に無限絶對に入るのであります。

『我神』なる意識は無上尊榮であります、世の中に『我神』の意識ほど尊ひものはありません、『我は神也』との意識の中には、凡ての宗教が含まれて居るのであります、人生の意義といふのは、取も直さず『我神』の啓展創造に外ならぬのであります、取も直さずこの『我神』の啓展創造あるが爲に、人生の價值は定まるのであります。

先生は既に『我神』と云ふ意識を得られたのでありませうか。

勿論です私は神であります、此の肉體この儘ながらの神であります『肉神』であり

ます、この意識は、自ら豫言者であるといふ自覺の本因と云つてもよろしからうと思ふのであります、豫言者は則ち『我神』の事實であります、證據であります。

『我神』の意識を得られますならば、それこそ大したものでありますけれども、手前共にはなかくに思ひもよらぬ事でありませう。

それは君が自我の價值を知ぬから意識を得られぬのであります、君の心靈とても本來からして神であります、何も神でない者が無理に神の意識を得やうとするのではありません、本來神でありながら自ら知らない爲めに意識を得ない迄の事でありませうから、若し自我の價值を知りませうすれば、意識は直に來るのであります。

私共もその心靈の曇りが取り去りたいのであります、どう致しましたならば、其價值を晴れやかに知るのでありませうか、その方法と云つた様な譯のものは御座りますまいか。

豫言者曰く、君の一心を傾投して以て、偏へに豫言者の心證を信じ給へ、豫言者を信じませうすれば、そこに忽ち自我の價值が覺れるのであります、斯て信仰の力は直に救済であります、豫言者を信するが故に同化するのであります、同化するが故に自覺を啓くことが出来るのであります。

それ豫言者は、大宇宙の創造であります、宇宙的救済の事實であります、それ故に豫言者を信ずるのは、取りも直さず自己自身を信ずる譯柄となります、さればこそ神の自覚が啓けるのであります。

豫言者を信ずるの信仰は、直に自己の自覚を啓くのであります、そこで信仰は自覚の始めてありまして、又終りであります、所詮は覺信一如であります、かるが故に豫言者を信ずるといふ事は、自覚の客觀的であります、客觀的自覚でありますから直に主觀的に自覚が啓けるのであります、要するに、客觀的自覚は即ち信仰であります、主觀的信仰は即ち自覚であります。

先生が『肉神』と仰せられます此の肉體に屬する性慾は、果して何うなるものでございませうか、性慾は無くなるでせうか、或は起らなくなるのでありませうか。

性慾が無くなつたら、肉體は無いのであります、肉體がある限り性慾はあります、が、『我神』の自覚と共に、性慾は忽ち神聖の意義を生するのであります、一旦『我神』を意識すれば、肉體は立ろに靈化して、性慾は直に神聖であります、神聖、な

るが故に聊か犯かす所がありません、さればこそ『肉神』と申すのであります。

『肉神』といふ名稱は、何んだか變に聞へまして神として難有味が少ないやうに思はれますが。

耳新らしいものですから、變に聞へるのでありませうし、何事も新しいものは皆有難味のない變に聞へるものであります、耶蘇が神を天の父と唱へ出したのも、父と申せば既に肉體を豫想するのではありませぬか、然し耶蘇は、私の申す『肉神』の意味で云つたのではなく、愛の切情を申したのでありませう、然しながら耶蘇彼自身は、知らず知らず私の所謂『肉神』に近づき來つたので有ます、神の子といふ尊榮なる意識のために、彼れは十字架上に殺されたのであります、現に今日の耶蘇教徒が、彼れを目して神の子、則ち三位一體の神として信仰するのは、『肉神』の信念に近いのであります、是が客觀の信念に止まらなくて、自己の大自覚とならねばなりません、耶蘇は『我神』の意識にまでは到達しなかつた、それでありませうから、性慾神聖の妙諦に至つては、中々に悟ることが出来なかつたのであります、更に猶太的有神思想を脱却し得なかつたために、將に成長せんとした彼が『我神』

の意識も、上帝の信念との衝突を免れないで、折角の神の子の意識も、後世に其成長を見ることが出来ないで、僅かに彼れ耶蘇の一身上に、臆に其信念を保たしむるに止まるのであります。

釋迦牟尼は『我神』則ち『我佛』の意識を得まして、更に上帝の思想がなかつたのでありますから、我佛の意識に聊かも拘束さるゝ事なく、大自在境にあることを得ましたが、印度の禁慾的襲想到に制せられて、性慾神聖の妙諦は、夢にだも悟り得なかつたのであります。従つて消極的に五慾の離脱に陥りまして、我佛の意識も其意義を失し、寂滅涅槃の無我境を希求するに至りまして、遂に没我の自家撞着に終つたのであります。

耶蘇基督も、釋迦牟尼も、共に『肉神』の眞諦、則ち肉體靈化、性慾神聖の妙境は彼等の知るところではありませぬ、『我神』の意識は、遂に『肉神』の事實とならねばなりません、『我神』則『肉神』と云ふに至つて、始めて宗教の秘奥が完へせられるのであります。

神の意味、則ち『肉神』の意味は、明かに了解されました、彼の佛教の因果因縁説の如き、私に取りましては英の役にも立ちませぬ、世間の人は、人力の及ばぬ場合には、ア、天命だと云つて諦めるやうでありませぬ、是は何の意味もないことと存じます、私の身の上では、運命説によりまして諦める譯には参りませぬ、因縁説の有無は何の關するところもなく、つまり有つたとて無かつたとて同じであります、要するに私の如き悲惨の境遇にあるものには、自然界の無情と、内界の慾望との衝突より生じますこの悲惨は、何に依りて安慰を得らるかとの疑問になります。

偏に『我神』の意識に於て、始めて安慰を得るのであります、『我神』の意識に於ては、大宇宙も自我の一部に過ぎませぬから、無情とも暴戾とも見ゆる自然界の作用も、畢竟自我の作用に外ならぬ事を承知しなければなりません、小さな五尺の肉體に囚はれたら、無情とも暴戾とも思はれませうが、自我の一部に過ぎない大宇宙を達觀し來りますると、何等の衝突もそこに見出すことが出来なくなります、天刑病は天刑病のまして何等憂ふる所も悲むところもありませぬ、この靈化の妙境に到達しますると、是非天刑病を癒さねばならぬとか、癒さねば苦痛であるとか云ふ慾望は、最早や超越し去つて居るのであります。獨り疾病のみならず、死生の一大事を超越するのであります、是の天自在の心境こそは『肉神』の生活意識であります。

す、現代の自然主義は、君が疑問とせらるゝ、自然界の無情と、内界の慾望との衝突を、一増深刻に主張した者であります。自然主義が云ふのには、如何に悟りを開いたとて、如何に宗教が教へたとて、悲惨の事實は飽くまで事實であるから、仕方がない、此の事實が存在する限りは、宗教も悟りも、皆な空想であると云つた風な見解であります。がそこに非常な誤謬が伏在して居るのであります。事實が事實であるからこそ、宗教も信念も愈々必要となるのであります。人生に此の事實がない程なら、それこそ宗教も信念も要らない筈であります。

従來に於ては、宗教に對しても、哲學に對しても、薄つぺらな皮相な考へを以て迎へて居ましたから、實際上の力とはなつて居ないまでも、免に角尊敬されて居つた、それが近代になつて著るしく自覺して來て、人生の真相の一面を看破して參りました。故に哲人が云ふた理想も何もメチャ／＼にしてすつた、あれは空想に過ぎなかつた、是までは頼むに足らぬ七色の虹霓を見て喜んで居たのであつたと、愈々益々懷疑と煩悶に陥つた次第であります。

さすがに自然主義は、虹霓の空虚であることだけは見破つた、然し虹霓は偶然にして起るのではありません、其底には太陽の實在があります、豫言者の教は、即ちこの太陽であります、それで自然主義が何時までも煩悶し懷疑したばかりでは、何にもなりません、この太陽に照らされて、唯今申した大自在の心境に立たなければ駄目です、それが困難であらうと何であらうと、斷じて此の自覺の上に生活し得るでなければ、人生の意義は滅亡であります、その自覺の生活が出來得る丈けに、人間はそれほど強く始めから出來て居るのであります、それが困難だとか六ヶしいとか、め／＼泣いて居る位なら、華嚴の瀧へ飛び込んだ方が寧ろ意義に於て確かです、現代はこの太陽の光に浴するまでの道途でありまして、煩悶懷疑はその道途に横ふ雲霧に外ならないのであります。

第六章 宇宙と自我

或人問ふ、

私は哲學を深く究めたいと思ひまして、獨逸から歸りましてから後も、續いて研究はして居ますが、愈々究むれば愈々懷疑に陥るといふ次第でありました、今日の處では、大體の處だけは解決したやうにも思ひます、唯實在と現象との關係、或は心靈と物質との關係とも申まじやうか、この點ばかりは何うしても解りませぬ、我國にても近來一元的に、物質も心靈であるといふ輸入思想も出來た様子でありますし、現象則實在論など陳腐な説も出來ますし、一方東洋哲學も發揮して參りましたが、私は何うしましたも解りかねまして、今だに物質と心靈が神祕に蔽はれて、自ら一見地を立せることも出來ませぬ、この點について、先生の御説明を願ひたいのでございます。

そんな哲學の説明などする人は、大學の教師に澤山ありませう、哲學を研究する様な心得では、豫言者の教は解りませぬ、私の申す所は直覺その儘であります、私の靈覺の上から申せば一の『我』則ち『眞の我』に歸して丁ふのであります。

例へば我と云ふ一個人は、この五尺の身體を備へた我でありまして、肉體は則ち我の一部であります、斯の如く物質方有も、天地宇宙も、我の一部に過ぎないのであります、我の身體は物質でありまして、万有の元素と同一の元素から成り立つて居

ります、詳しく申しますれば、太陽の熱も、空氣も、山も、海も、皆我が肉體の中に入つて居るのであります、譬へば先づ眼に觸れた宇宙から申しますると、天體無數の日月星辰とさせう、この日月星辰も、まづ我が太陽と地球とに似たものとして、如何に無數の星辰があつても、近くわが地球と大差はありますまい、そこで此の地球に就いて申しますると、地球の中心は火でありまして、その火はマツチの火と同じものであります、それから外面は、陸地と、海水から出來て居ります、陸地の精粹は、草木でありまして、その精粹の精粹は、動物であります、又海水の精粹は、海藻でありまして、その精粹の精粹は、魚類であります。

五尺の身體は、是等海陸の精粹を食ふて、以て生活して居るではありませぬか、即ち禽獸虫魚、草木穀土は、皆悉く我が血となり、肉となつて居るではありませぬか、わが血と、肉は、即ち禽獸虫魚、草木穀土から成り立つて居る、禽獸虫魚、草木穀土は、即ち陸地と海水とから成り立つて居る、然らば即ち五尺の身體は、地球の精粹の精粹から成り立つて居るから、地球は、直に我が五尺の身體中に抱容せられて

(〇四)

居るのであります、太陽が五尺の身體に於けるも同じ事であり、果して然らば廣大無邊の天地も、森羅萬象の一切も、悉く皆な、この小さい五尺の身體に抱容されて居るのであります、この五尺の身體は、直に大天地その物であります。

目に見へる方面すら既に此の事實でありますから、目に見へない觀念中の實在に至つては、まことに、無限絶對其まゝに自我であると云ふことが解るのでありませう、理論でも空想でもない、事實の事實、有りの儘の直觀即覺であります。

大山、兀として雲に迫り、樹林は、衣の如く半を纏ひ、長江、其踵を施りて千里に注くを見るや、雪舟牧溪も、筆を投して嗟嘆に餘るの風致も、山を穿ちては礦物を取り、林を伐りては材木を出し、水を渡るに舟を浮べ、魚を捕るに鵜を放つのであります、或は疾病には藥石を用ゐ、或は滋養には鳥獸を屠りまして、動植礦液の諸物、悉く我が身體のために備はらぬはないのであります、日月星辰の廣大も、森羅萬象の巧妙も、結局我の一部に過ぎないのであります。

『眞の我』は、心靈に直覺するのであります、哲學者は之を稱して實在と申しま

す。

哲學的に一言にして之を申しますならば、現象は、時々刻々に變化して已みませぬから、ついに常住不變の觀念に到達するのであります、この常住不變の觀念こそ、則ち實在の觀念であります、故に既に『眞の我』に到達しますれば、現象物質を超越しまして、一ノ『我』の本位、に歸するのであります。

『眞の我』は我自己の本體でありまして自我であります、私の靈覺の『我神』は、則ち是れであります、『眞の我』の觀念は『我神』の意識の本源でありまして、心靈の上に直覺する事實であります。

先生は始終靈的に御話になりますが、唯物論に附ては、如何に御考へなさいませうか、世に唯物論を主張して、無神無靈魂など唱へますが、御高説を伺ひたい存じます。

(一四)

唯物論と申すのは、名目からして既に淺薄の意味をあらはして居りまして、哲學と云ふことは出来まいかと思ひます、現象以上に理想を馳することの出来ぬものに、哲學の名稱を附するのは間違ひでありませう、唯物論者が認識とか經驗とか喧し

く申しますが、経験認識はよろしいですが、其経験と認識とは、何によりて得られるのか、何が経験認識するのであるか、則ち意識でありましたやふ、意識は何處にあるか、この内界に、自覺的作用をなすところの根本的主觀法を認めさせぬし、感情意思の如き心的作用を悉く排斥しまして、腸胃等の消化作用と同一視するに至りては、卑近且つ幼稚で論外であります。

然し、今日になりましたは、こんな淺薄な唯物論者は恐らく一人も居ないであらうと思ひます、私に於ては唯物論であらうと、唯心論であらうと、そんな事には何も順着するてありませぬ、如何に唯物くと云ふたところで、心的作用を認めぬ譯には參りませぬ、心的作用を物質がしやうと、何がしやうと、心的作用でありさへすればそれで澤山であります、又唯心くと云つても、物質的作用を認めぬ譯には參りませぬ、されば唯物と云はうと唯心と云はうと、單に名目上の言ひ草でありまして、靈覺などには、何等の關係も交渉もある可きものではありませぬ。

第七章 神の生活と道徳

或人問ふ、私は幼少の頃から、隨直に道徳を守つて参りました、丁度十一歳の折、父に死別しまして、叔父なる人が養見して居ました、十五歳の頃でありましたか、後見の叔父が奸策を廻らしまして、私の財産を横領してしまいました、その奸策に一味しまして手傳ふたものが、非常に亡父の存命中に世話を受けた者であります、この者は、亡父の友人の孤兒で、亡父も氣毒に思ひまして、宅に引取つて世話したのでございます、法律學校も卒業させ、辨護士にしてやりました、一人前の紳士に仕上げてやりました者でございます、其者が恩を仇に報いたのであります、私は當時、叔父と辨護士を殺さうかと思ひましたことは度々でありましたが、一家の爲めに引かされまして思ひ止まりましたのでございませぬ、其後、家計不如意となりまして、多少の積財が出来まして、其返済が届きませぬから、債主は私の妹を金のかたにと申しまして、無理に連れ去りまして、教育どころではありません、犬馬の如くに逐役ひまして、やつと年頃になりましたところが、言ふに忍びざる振舞をしました揚句、或遊廓に賣飛ばしたものでございませぬ、一度は自由職業をしましたが、事情あつて、再び遊廓に勤める身となりましたところ、妹も世をはかみたものと見へまして、昨年十八歳のとき、遊治郎と情死して斃れました、其急報に接しまして、母は癪を起しました、その癪が習慣となりまして、程なく死なりました、私は本年十二歳の妹と、三人ばかり暮して居りますが、この妹も、小供心に心配しまして、耳を病ひましたのがつい癒らないで、其儘變となつたのでございませぬ、私は今、盡は生活のために勞働しまして、夜間學校へ通つて居ります、天道果して是か、非か、私の家はかゝる悲惨に沈んで居ますのに引かへまして、叔父は尤も死んださうであります、辨護士も高利貸もともに繁昌致しまして、榮耀に暮して居るさうでございませぬ、私の如き境遇にある者は、何ら心ても道徳の價値が認められませぬ、倫理學も餘程調べて見ましたが、何故に人は道徳を守らねばならぬ

かと、根本問題は當然として解りません。

近頃自然主義の道徳超越論なども、益歡迎されるやうでございますが、私は寧ろ自然主義の道徳無視的主張の方が、或は眞理ではあるまいかと頗る感ふて居るのでございます。

人類は神の生活創造者でありますから、茲に道徳、愛の生活が生じます、愛の生活は道徳を創造し創造して行くのであつて、新たに道徳を造ります、人類が各々個體を備へて居ります限りは、道徳創造即ち愛の生活である、愛の生活は即ち愛を創造するので、道徳は創造愛の名目でありまして、其淵源するところ、まことに宇宙的であります、**我の本體なる『眞の我』は本來愛でありまして『我神』は愛の創造者也、人類は皆愛の創造者でありまして、この創造愛が、互に相愛しまして、愛の融和をなすのであります、是を名けまして道徳といふのであります。**

先生は、人類は悉く愛の個體であると仰せられますが、世の中には、随分ひどい悪人も見へますし、あれでも愛の創造と申されますならば、善悪といふものは認められぬことになるではございませんまいか。

凡そ愛の眞實在は、善悪を超越したものでありまして善悪以上のものであります、何となれば愛は『眞の我』の本質であるからであります、それ故に愛そのものには、

善悪のあるべきものではありません、たゞ創造愛の融和の上に於て。道徳が成り立ちまして始めて善悪が生ずるのであります、凡そ愛なるものは、自愛と、他愛とを超越しまして、彼我を脱出したものであります、則ち『眞の我』は斯の如きものであります、唯一たひ人類の個體に宿りまして、彼我の關係を生じ、自愛、他愛の兩面を區劃するに至るのであります、然しながら愛の本質として、自愛則ち他愛、他愛即ち自愛であるが、それが矛盾をするので、善悪が生ずる譯であります、則ち自愛に固退するものは、不道徳となりまして悪人となり、他愛に融施するものは、道徳となりまして善人となるのであります、愛の本質則ち自他一如は、道徳の歸趣でありまして、個體肉を放擲して犠牲となる衝動が潜在して居るのであります、故に孰れの宗教、道徳に限らず、犠牲を教へぬものはありません、人々の爲に身を殺す、愛の生活即ち犠牲であります、一言にして之を申しますれば、善悪の別れますのは、自愛と、他愛の衝突より来るものでありまして、眞の自愛は即ち他愛であり眞の他愛は即ち自愛である可きであります。

斯くの如く、等し、愛の個體であります人類が、如何なる譯で、一方は、自愛に固退しまして悪人となり、他方は、他愛に融施して善人となることを得るのでありますやうか。

人類の心霊は直に神であります『我神』であります『我神』は、意思であります、意志は、本來愛でありまして『我神』の自愛即ち意思となりましては、自尊自重の根原でありまして、無上尊榮を生むのであります、それ故に天上天下唯我の獨尊と、盡十方周遍の慈悲と相即一如して、釋迦牟尼如來を形造ることを得たのであります。茲に注意すべきことは、凡そ我といふ我れには、必ず意志が原となるのであります。我則意志、意志則我であります、シヨツペンハウエルが實在を意志と見ましたのは、この間の消息を得たのであります、然しながらシヨツペンハウエルは、唯單に意志とのみ悟つたのでありますから、遂に意志の消滅を希求しまして、無我無慾の境界に入るのが、道德の根本、解脱の妙境とするに至つたのであります、若しシヨツペンハウエルをして實在なる意志は冷かなる意志に止らないで、意志は本來愛であると、意志則愛、愛則意志であるといふことを悟らしめましたならば、彼は必ず

意志融和の積極的道德を發見したに相違ないと思はれます『眞の我』は、愛即ち意志でありますから、人類の創造愛も、同時に創造意志でありまして、自愛、則ち意志となつては無上尊榮であります、この創造意志の方面のみを認めまして、創造愛の方面を認めませぬのが、所謂個人主義であります、ニーチエの如き、イブセンの如き、ゴルキーの如き、皆この主義であります、この諸氏が、宗教を罵り、道德を無視するに至るのは勢ひ己むを得ぬのであります、然しながらこの諸氏の如きも、皆人生の探求を以て自ら任じまして、熱心誠意に時弊の急所を突かんと、覺へず知らず、極端に走るのであります。意思の發展するところが自愛に固退するのであります、意志の融和するところが他愛に融施するのであります、意志の發展、則ち自愛でありまして、意志の融和、則ち他愛であります、個人主義の如き、専ら意志の發展のみを權にせんとしまして、其融和を認めませぬから、自愛に止まりまして、他愛の融施とならぬのであります、自愛に固退して他愛に融施せぬものが、如何て宗教道德を語ることを得ましたやうか

(八四)

個人主義は、耳を持たない目ばかりギョロ／＼した一目の怪物であります。シヨツペンハウエルの如き、消極的に意志の消滅を欲しまして、無我寂滅を唱へまするし、ニーチェは無鐵鎧に意志の發展を檀にせんとして個人主義を主張したが、何れも兩極端に走れるのでありまして、共に真理ではありません、この弊に陥る所以のものは、何れも全く、絶對生命なる『眞の我』の直覺を得ないからのことでありまして、若し愛即意志の『眞の我』を直覺しますならば、消滅せんとする意思と、發展せんとする意志とが、自然に融和せざるを得ないのであります、意思の融和や則ち愛であります、博愛であります、茲に自愛と、他愛とが調和されまして、道徳が行はれるのであります、自己意思の發展のみを欲しまして、他の意思との融和を認めませぬのでありますから、不道徳が生ずるのであります、悪人は則ち是れてあります、意志の發展と、意志の融和との衝突するところ、則ち善惡の別るゝ所でありまして、

之を要するに、意思の衝突、則ち愛の衝突を來しますのは、畢竟人類が個體肉を保

(九四)

つところから生ずる弊でありまして、則ち罪惡苦痛の根原は、個體肉にあるのであります、個體肉を離れますれば、善惡苦樂は立ろに消滅しますが、善惡苦樂が消滅したら人生も共に立ろに消滅する、故にシヨツペンハウエルの如きも、極端なる厭世觀に陥りまして、自殺論を唱ふるに至つたのであります、原始佛教の如きも、ひとしくこの通弊を免るゝことを得ぬのでありまして、然らば則ち、罪惡の根原なる個體肉は、如何ともすることが出来ぬのであるか、自殺より他に救濟の道はないのであるかと申すのに、茲に豫言者の齋らす『我神』の福音の救濟が行はれるのであります。

我といふ我は、絶對自由者であります、されば絶對自由者なる我が、何故なれば善は之を行ひ、不善は之を避くるのでありませうか。我といふ我は、則ち神であります、我は則ち神であるからであります、我といふ自我は、神であらねば承知が出来ないものであります、自我は神であらねば承知が出来ないといふのは、この神の承知こそは、自我本來の面目を承知したものであるからであります、若しそれ自我が、

神でないとするれば、善を行ふ必要が何處にありませう、不善を避く可き理由が何處にありませう、絶対自由者は勝手に振舞ふ可きでありますまいか、この絶対自由者が、善は苟も之を行ひ、不善は苟も之を避くる所以のものは、實に自我が神であるからであります。

そこで天の神の信仰を失ひ、地の佛の信念を無くした現代、然も猶未だ神の自覺を得ない、自我の神たる承知が出来ない現代は、善を行ひ、道德を行ふに甚だ覺束ないものがあります、道德は單に方便や功利として、僅に存在するに止まるのであります、こんな薄つぺらな墮落した状態に、人間が満足して生活することが出来ませうか、現代の懷疑煩悶は、全くこれが爲であります。

そも善は、絶対善でなければならぬ、道德の價値は絶対善に存するのであります、絶対善にして始めて道德の權威はあるのであります、絶対善でないならば、道德の意義は全く没するものであります。

絶対善は自我の全意志であります、自我の全意志でなければ、絶対善は有り得べからざるものであります、それ故に、自我は神であります、絶対であります、自我は絶対なる神でありますから、茲に善を創造し、道德を創造するのであります、神の自覺ある自我から出た善、この善にして始めて道德の價値と權威とが生ずるのであります。

豫言者の新福音は、茲であります、天の神に依つて安心を得たと思ふのは、實は自ら自我に歸つて安心したのであります、神に依つて力を與へられたと思ふのは、實は自ら自我の力を呼び興したものであります、この譯柄を心の底から納得して、自我は、本來からして神であることを自ら承知し、この自覺の上に生活しまして、自ら神であるから、善は苟も之を行ひ、新たなる善を創造し、神であるから道德を創造すると云ふ、嚴乎たる不拔の衝動に基かなければならぬのであります。

第八章 靈魂及び未來と自我

或人問ふ、自分の身の上のことを人様に御話し申上ますのは、まことにきまりがわるくつて、御耻しい譯でございますけれど、胸の中にとめて置きまして獨りて苦みますのは堪へられませんのでございませうから、それに何ういたしましたも解りかねますことがございまして、是非先生に何つて教へて戴かねば安心が得られませぬのでございませう、それは外でもございませぬ、靈魂のことなんてございませぬ、私は十六のときに國を出まして、唯今は或る高等の女學校で勉強して居るのでございませぬ、一昨年の秋でございませぬ、或陸軍の士官なる人と、結婚の約束をいたしましたのでございませぬ、この士官は、久しい交りでありまして、互に思ひ思はれた間柄でございまして、いづれは私が學校を卒業しました後に、一處にならふといふとで、日曜日毎に相會しましては、楽しい月日を送つて居りましたが、昨年の夏の初めつた、その人がフト赤痢に罹りました、届くだけの看護はいたしてみましたが、とうとう歸らぬ郷に旅立ちいたしましたのでございませぬ、それからと申すものは、私の悲みは、とても言葉などに言ひ盡せることではございませぬ、墓參をしましても、何だか夢の様でございまして、廣い世間には、私のやうな境遇の方もございませぬ、自分獨りのやうに思はれまして、諦めがつきませぬのでございませぬ、其當時は、後を返ひまして死ぶかとまで思ひつめましたことも度々でございませぬ、新聞などで時々心中のことを見受けまします、人様はお笑ひなさいませぬか、存じませぬが、私の身にとりましてはあれが羨ましいほどでございませぬ、死なつた良人の靈魂は、一體何うなるものでございませぬか、煙見たやうに消へ失せましますのでございませぬやうか、または、ちやんと有るのでございませぬか。

それは御氣毒千萬のこととございませぬ、人生の無常と申すのは、そのことと

ございませぬ、勿論、靈魂は永遠無窮に存在するものに決つて居りますから、未來に於て再び良人へ御會ひなされることは疑ひもないこととございませぬ、現世に比べますれば、幾倍も〜楽しい境遇でございませぬ、何となれば、靈界でございませぬもの、靈界に入りましますのは、夢の覺めたやうなものでありまして、死ぬるのは夢の覺めるのでございませぬ、唯靈界は所謂靈界でありますから、この世のさまとは違ふといふことは、記臆して戴かねばなりません、御會ひなされるにも、この世の有様とは違ふのでありまして、我といふ自我が、明かに本體（自我）の中に生活するのでありますから、實に幽妙不可思議界で、形容などの出来るものではありませぬ。

會はれますものなら、どうぞして會ひたうございませぬけれど、何だか疑はれますので。

かやうの事は、決して疑ひを容るべきものではございませぬ、疑ふべき餘地がないのでございませぬ、會はれるものなら會ひたいと仰つしやるのが既に信仰の門であります、其會ひたいといふ一念は、心靈上の希求でありまして、所謂信仰と申すものは是でございませぬ、哲學や理智を超越した、自我本來の傾向でありまして、宗教と

申しますのは、則ちこのことごとく申します。

なるほど、よく解りましてございます、信仰致しませぬ、靈魂不滅を信じます、靈魂が若し消滅して無くなるものとなりましたらば、人間程詰らぬものはないかと存じます、先日、佛教の方にお目にかへりまして、良人の死なつたことなど仰つしやいましたが、越しかたを考へて見ますと夢のやうにも思はれませんが、この頃になりました、時々夢の中に現はれまして、其姿がそっくりそのまゝでございます、にこやかに話します、目が覚めましてから、ア、惜ひこと、モ暫くと思ひますのでございますが、そう思ふ我が身もまた夢のやうでございます。

佛者は是まで、現世を墓ないく、夢や幻のやうであるなど云つたものであります、
が、現世、現在は、決して夢として見る可きではありません、更に注意すべき事は
これまで夢といふものを、煙のやうな摺へ所のない空なものとして居ましたが、夢
といふ者は、なか／＼そんな空なものではありません、之を心理學として科學の研
究を試みて見ますと、醒めて居る時の事實と少しも異つた事のない、心の働きて
ありまして、現に醒めた時の事實その物よりも、夢の中に反て確かな、又優つた現
實が存在し含まれて居ることが、往々にあるのであります。

現世、現在、現實の實在觀念に對しましては、自我が實在である限り、凡そ自我に
觸れたる一切の觀念は、悉く是れ實在であることを承認せなければなりません、そ
こに深淺輕重、大小長短等の差別はありまして、實在たるに至つては異なること
ろがありませぬ。

未來の觀念、靈魂の問題に於きましても、同じ譯であります、從來は、未來と云へ
ば遠い事のやうに、有るやら無いやら、雲を摺むやうな考へて居る人が多い有様で
ありましたが、この豫言者が出た以上は、斯る薄つべらな考察は斷じて容さないので
あります、未來と申しますのは、自我の實在觀念でありまして、無限なる自我其
のまゝの實在であります、自我の向上に對する實在の觀念に外ならぬのであります、
また靈魂と申しますと、何か我と別な幽靈見たやうな姿をしたものとなりまして、
一種異つた有様のやうに考へて居ますが、それは飛んだ誤謬であります、自我の
の儘の有様に外なりません、唯肉體こそ解散させようが、自我の解散はあるべきも
のではありません、肉體を脱却した自我、是ほど明かな確かな自我はありません、
この明かな確かな自我を稱して靈魂と申すのであります、そこで靈魂があるとか、

無いとか、そんな事は問題として攻究すべきものではありませぬ、又、未來が有るであらうかとか、來世があらうか有るまいかとか、こんな問題は問題とはなりませぬ、從來は、随分こんな詰らぬ問題の爲に惱まされたものでありますが、豫言者が出た以上は、そんな詰らぬ問題の攻究を容しませぬ、左ういふ問題を攻究する有様を譬へて申しますならば、丁度馬をとらへて鹿ではあるまいか、牛ではあるまいかと疑義を狭んで論ずる様なものであります、馬をとらへて鹿ではあるまいかと疑ふのは、誰しも詰らぬ疑問と直ぐに承知しますけれど、未來の有無問題、靈魂の存否問題など、如何に詰らぬ馬鹿げた問題の疑義であるかに氣が附かないのであります。豫言者が申します、未來の有無とか、靈魂の存否とかは、決して疑ひを入れるべき性質のものではありませぬ、斷じて信すべき信仰すべきものであります、人間はこの信仰の如何に強かるべきか、如何に深かるべきか、如何ほどまでに此の信仰が進む可きか、目に見るやうに手に取るやうに、否々、現在と未來との區劃を超脱した現實の永遠意識とならねばなりませぬ、永遠現在の意識であります、靈魂に於ても

た斯の如してあります、自我この儘の永遠存續、永遠自我の現實意識となる可きものであります、信念の力と申しますのは即ち是であります、未來の有無とか、靈魂の存否とか、そんな詰らぬ攻究の無駄な時間は、悉く之を如何に信仰の強かるべく如何に現實の意識の確めらるべきかに、努力する最も大切な時間に用いなければなりません。宗教の信念といふのは茲の事であります、また世の倫理道德と申しますのも、此の信念の基礎の上に築かれませぬならば、何等の力も權威もあつたものではありませぬ、自我永遠の啓展創造は取も直さず倫理道德でなければなりませぬ。肉體があれば話もされ笑ひもされますけれども、靈界のとは、そんなものではありませぬ、この世に於ましても、言はず語らずの間に精神上の交通が出來ますのは、極親しい間柄であります、例へて言へばそんなものであります、クリスト教の一派にトラピストといふのがありまして、沈黙は神の道を実行するのであると信じまして、終生口を噤んで、其仲間には唯精神上の黙通をして居るのであります、つまり話したり笑つたりしますと、其間には、必ず怒つたり怨んだりすることが出來

てまいりますので、御良人と御一所で居らつしやるならば、今の様に慕はしくもありませんが、精神の交通、則ち靈魂の交通ほど神聖なものはありません、それ故に古人も死は其人を神聖にするに申しましたが、實にこの神秘の消息を喝破したものであります。

或人問ふ、私は田舎出のものでございます、小供の時分から育ちが悪ふございまして、十四五の時には、早や賭博を覚へましたのでございます、車を挽いて稼いで居ましたが、附ひた癖はなかく直りませぬ色々異見も受けましたが、若い時分には異見も羨も糸瓜の皮で、雪の降りますのに、素裸で勝負したこともございました、明治十一年頃、丁度十九のときでございました、世にも恐ろしい人殺までやつたのでございます、忘れも致ません、梅雨の大降り之夜でございました、相手は、盲坊主の鍼師でございましたが、獨身もので、賭博が大の好きな奴でございまして、こいつ盲の癖に、なかく甘ひのでございまして、仲間でも屈指のやり手でございましたから、私も負けることが多かつたのでございます、處が其夜に限りまして連戦連勝です、奴さんとうく財布をばたきました、すると奴さん一番やるから借せといふ、貸さぬといふので口論から組打になりまして、私を二階の梯子段から蹴落しました、此時はランブも何處かへはれ飛ばされて燈火も消へて居ましたが、この野郎といひさま二階へ駆け上りますと、奴さん何かで以つて私を撃つたのです、坊主めと勢込んで突飛ばし、馬乗になつて押へつけましたが、盲が持て居ますのが鞘のましの短刀です、是には驚きましたが、油断をすればやられますから、ス速くモギ取り、胸のあたりを一と突、二突、丸て夢中でございます、急所をやつたと見へまして、譯なく往生いたしました、思ひ出しますとゾットします。

短刀を持つたまん宙を飛で駆け出して、覺へず知らず我家の邊まで来て居りました、なかく家には寄つかれませぬ、足に任せて章陀天走りです、早や一里も来たと思ひますと、東の空が白みましたが、短刀に氣が附くと、橋の上から川中へ指して投込ましてございまして、それからと申しますものは、御話にも出来ませぬ憂き難難をいたしまして、諸々方々の國々を忍びまして、信州の方へ一年、大阪の方へは半年といふ譯で、同じ處には何うしても長くは居られませぬ、此處こそ潜むには屈強の處と思ひまして、やつと足を止めますと人殺しの話が出ます、まさか自分の事を知つて居る人もありませぬが、大罪を犯した身のつらさには、何やら氣が咎めて落つかれませぬ、直さま遠路を指して旅立つといふ譯でございまして、左ういふ中にも法律の委はしい人に遭ひましては、満期免除のことを聞きますとか、刑法治罪法を需めましては讀みますとか、なかく一日も心の落つく暇とてはございませぬのでございました、月日の經ちますのも速ひものでございまして、まだかくと待ちます中に、早十五年も過去りまして、十六年目の年の暮に、地方の警察署へ自首して出ましてございまして、其後は堅氣になりまして、唯今では實業に就きまして、一心に稼いで居ますのでございます、法律上では罪を免れたやうなものでございまして、當時のことを思ひ出しますと、夜分にも心地よく眠れぬことが度々でございまして、私の様に人殺をした身には、魂は消へて無くなる方が、よろしうございしますが、若し魂は消へぬものでございしますならば、勿論、私は地獄でございませう、が何うか地獄の苦み丈は免かれないものと存じます、先生の御宗旨で、御濟度下さることは出来ぬものでございませうか。

(九五) 未來に於ける靈魂の境涯は、とても地獄や極樂の形容を以て表はすことの出来ない
幽妙の境涯であります、地獄の方から云へば、地獄以上の地獄であります、極樂の
方から云へば、極樂以上の極樂天國以上の天國であります、この妙境を稱して、豫

(〇六)

言者は『神の靈的生活』と申します。

君が、極樂が何うの、地獄が嫌やだのと云つて居りますのは、まだく此の世に囚はれた、物慾に敵はれた、肉に縛せられた煩惱の聲であります、なま中に君が法網を潜つて生き延びたから、そんな横着な量見が出るのであります、人を殺した大逆を犯したならば、男らしく自首して刑に服するのが當前であります、無期徒刑でも死刑でも苦情はない等でありませぬか、死刑となつて死んだ先きが、たとひ八萬地獄であらうが、無間地獄であらうが、行く所までは行かなければならぬでありませぬか、大逆を犯した以上は、何んな處でも何んな刑罰でも受けましやうと心からの覺悟が出なければなりません、これ位の覺悟は出来る様に、ちやんと人間の心は出来て居ます、この覺悟が出来ないと、そこが地獄であります、君が罪を犯して以來、十有幾年の苦痛の生涯は地獄の苛責であります、今から未來の地獄を豫想した君が憂悶は、此の世からなる無間地獄その儘の恣であります。

君が犯罪の當時、不幸にしては不幸、幸にして捕縛せられたならば、少くとも無期徒刑位には處せられて居ませう、さうすると君の精神には幾分か罪を贖はれた安心が出来て、心持ちか善くなるのであります、更に死刑でも宣告されたら、一時は驚くか知らぬが、一週間も経つたら心も平らになつて、相應に覺悟も出来たであります、さうなると始めて物慾から脱却され、肉の縛めから解放されるのであります、此の世の物慾と、肉體に屬する有ゆる一切の慾望とを絶した、死刑前の心には地獄以上の地獄も極樂以上の極樂もありくと、まのあたり見へるばかりか、心、直にその境地にあるのであります。

地獄以上の地獄と申すのは、物慾肉慾に敗亡した、其靈魂の貧弱な見苦しい姿に、われと我が心に愛憎をつかした、怨めしい、悲しい、やるせない苦悶の心情であります、肉體を脱却した靈魂は、端的にこの地獄以上の地獄に陥るのであります。

(六) この地獄以上の地獄こそは、靈的生活の關門であります、此の關門に於て斯る苦悶を経験すると、直にそこに關門が開くのであります、一たび關門が開くると、極樂以上の極樂、天國以上の天國であります、君が果して死刑に處せられて居ましたな

らば、既に死刑前に於て、此の關門が開けたに相違ありませぬ、さうすれば十有幾年前から、君は天國以上の天國、極樂以上の極樂に生活して居る筈であります。

非常な靈魂上の苦悶をしましたからとて、何うして天國の門が開ける事が出来ませうか、地獄の子は何時までも地獄ではありますまいか。

苦悶すると云ふのが、開けるからであります、苦悶は開關の前兆であります、丁度出産前に母體が苦むのと同様な譯であります、現に君は犯罪に就て悔ひて居ませう其悔ゆると云ふ事が、一切の贖ひであり一切の救済であります、悔ゆるといふ悔改の一念こそは、取も直さず開門を開く鍵であります、この鍵さへあれば開門は何時でも開られます、鍵は開門にぶら下げられてあるが、苦悶をせない人には與へられませぬ、苦悶をせない人は開門に達することが出来ない、開門に達しないで何うして鍵を見出す事が出来ませうか、^イ、加減な生冷るい苦悶は駄目であります、地獄以上の地獄のドツ底まで墮ちなければ駄目であります、そのドツ底に開門が築かれてあります。

この鍵は何うして備へられてあるかと申しますのに、開かる可き開門であるからであります、靈魂は此の開門を開いて、靈的生活を始むべきものであるからであります、人々の心靈は本來神であるからこそ、そこに鍵が備へられてあるのであります。

本來からの神でありますものが、何うして地獄の苦境に陥るのでございませうか、又、地獄に落ちるやうな羽目に出遣ふのでございませうか。

本來からして神であるからこそ、地獄に陥ることも出来るのであります、神でない者には、地獄も極樂もあるものではありませぬ、神だからこそ、地獄も天國もあるのであります。

豫言者曰く、地獄は、極樂の爲めの地獄であります、天國の爲めの地獄であります、切に之を申さば、地獄も、極樂の一部であり、天國の一部であります、地獄は天國の通路であり、極樂の通路に過ぎないのであります。

以上は、神の自覺を得ないで死んだ人の靈魂の有様を申したのであります、此の世に於て、苟も神の自覺を得た人は、此の肉體ながらの神でありますから、肉體

(四六)

を脱却したならば、一増、自覚が明かになり強くなるばかりで、地獄など通る必要もなければ、神の前にはそんな地獄もありはしない、直に靈的大生活が開展されるのであります、君とても本来からして神でありますから、自分自身に神であると承知をして御覽なさい、忽ち神になれます、未來でなく、死んだ後でなく、この身の儘ながらに「肉神」であります。

終りに申したいのは、地獄があるから、悪事を爲さぬ、極樂や天國があるから善事を爲すといふのは、報酬の觀念に囚はれたので、道德上最も卑む可きものであります、假令、善事を爲せば地獄に入り、悪事を爲せば極樂に行けるといふ轉倒した事があつて、善人は地獄の火に焼き潰されるとしたところで、何んな目に遭はうとも善事は矢張り何處までも之を爲し、之を行はねばならぬのであります、そは人々が皆な神であるからであります、斯てこそ始めて善の善たる價值も生ずるのであります。

第九章 デヴァイン、ライフ

或人問ふ、私はクリスト教の或有名な牧師の演説を聞きました所、今日の青年は悲觀をする人が多い、悲觀は詰まらぬことである、悲觀をするものは、畢竟意志の弱ひのであると云ふ意味でございます、演説に精神が無く、浮調子に聞へまして、私などには、寧ろ異様な滑稽に思はれまして、少しも感心が出来ませぬのであります、彼の牧師さんが、先づ両親を失はれ、其子女を失はれ、又其妻君を失くされ、其兄妹を失ひなされ、左うして最後に、御自身に大病に犯されなすつた後の演説でございますならば、耳を傾けて聞くことも出来ませうかと存じますが、外から他人の事を想像なさつた許りで、其可否を論ぜらるゝのでありますから、力がないのは勿論の事でございます、私の如き境遇にありますものは、悲觀せざるを得ないのでございます。

母は、私の五歳の頃、産後の経過が悪くつて死なりましたし、父は丁度日清戦役の當時でございました、朝鮮へ航海中海に投じまして溺死致しました、工科大学で勉強中でしたが兄は、不幸にも肺患に罹りました、其頃十七の妹が、晝夜看護しました爲に傳染致しまして、兄より先に薨れしたのでございます、兄は反て八ヶ月程生伸びまして一昨年正月に死なりました、本年十九の弟がござりますが、兄を送りました葬式の歸りに、寒氣がしましたのが因になりまして、始終身體が勝れませんが、是れもまた肺患に變じまして、唯今病床に休みついて居ります、中風の祖母は、八十一歳になりますが、活ては居ますけど、死人も同様でございます。

打明けて御話申ますれば、私には結婚上の默契を結んだ人がございましたが、私の家庭の不幸のために已むを得ず其人は、近頃或令嬢と華燭の典を挙げました、私はもう嫁に行く氣にもなりません、婿を取

(五六)

る氣にもなりませぬ、もう世間が嫌でく〜なりませぬ、人は失戀と申しますかは存じませぬが、戀の何のと、そんなどころではございませぬ、死なれますなら死んだ方が餘程安心と考へます、病床の祖母と妹さへございませぬのなら、遠うに一片の煙となつて了つて居るのでございませう、是迄には戀心も有つたこともございませぬが、モ一庭あんな氣樂な身になつて見たいと存じますのでございませぬ、お友達の方く〜が、皆な暖い家庭の中に、春の様に陽氣な生活をなさつて居なさるのや、美しい楽しいホームを造つて居らつしやるのを見ましても、羨ましくも何とも思はれませんで、朝露の輝や、虹のたなびく様な心地がいたしまして、唯慕なく思はれますのでございませぬ、西行法師とやらは、友人の死に會しまして、一朝世の無常に感激するや、四錢ばかりの可愛さかりの娘を蹴飛ばし、妻を捨て、母を捨てまして、出家するに至りました事を聞きまして、何うしてそんな心持になれたものかしらと、解り兼ねて居ましたのでございませぬが、今の身の上となりましては、西行さんなどの心持は通越しまして、ズツとく〜先へ行つて居やうかと存じますのでございませぬ。

御尤な譯でございませぬ、貴嬢の如き不幸の人は、世間に餘り多くあるまいかと思はれます、人生の真相は、悲觀の方からでなければ解るものではありませぬ、西行の歌に

世の中を捨るといふは捨るかは

捨てぬものこそ捨るなりけれ

とあります、世間一般の状態は、皆浮かれて居ます、あだなる名利に迷ふとか、はか

なき情慾に溺れるとか、まるで夢中で醉生夢死でございませぬ、凡そ人生の意義を知りますのには、死といふ問題から來らねば解りませぬ、死あればこそ生もあれ、生あればこそ死もあれ、死の問題は、則ち生の問題の根底であります、故にソクラテスも哲學は所詮死の問題である、哲學者は如何に死すべきかを必生の問題とすると申ました、これは如何に生く可きかといふ人生の問題を、反面から見た觀察であります、そこで悲觀を経ない人には、到底死の意義は解りませぬ、死の意義を解らぬ人が、何うして生の意義を解ることが出來まじやうか、貴嬢の如きは既に幾度の死の問題に遭遇され、世の無常を看破されましたから、人生の真相が能く見へるのでございませぬ、世間では、樂觀とか、樂天とかいふ様であります、悲觀を経ない樂觀は、迷妄でございませぬ。頼むに足らぬ樂觀でございませぬ。

(七六) 西行の如きも厭世家には相違ありませぬが、また一面の樂天家であります、世間の俗事を忘れて天地の大美に狂するといふのは、全く詩人であります、人生の真相を見た人でなければ出來ないであります、俗氣紛々の樂天家などが夢想することの

出来ない、寂樂とも申すべき心境を持つて居ます、西行が厭世の動機は全く其友人憲清の死に接しました時にあります、死は其人を神聖にするに申しますが、他の人も神聖にするのでありまして、人生に若しも死といふことが有ませぬならば、人生の意義は、永遠に解るものではありませぬ、例へば彼の耶蘇の十二使徒の如きも、耶蘇が捕縛せられました時には、皆四方に逃散つたのでありますが、彼の勇悍なるペテロさへも、一婢女の詰問に遭ひまして三たび耶蘇を知らずと云つて醜態を極めた程でありましたが、一旦耶蘇が十字架上に血を流して絶命すると、忽ち神聖なる救世主となりました、之を見ました十二弟子も、また忽ち神聖なる使徒となりまして、悉く血を流して殉教の最後を遂げた次第であります、貴嬢の如きも世の無常を觀せられて、人生の慕なきを悟られましたならば、それだけ人生の大切なことが解りましやう、そこに樂天の曙光があるのであります、苟も人生の大切なことを悟つたならば、所謂人生の價值を悟つたのでありまして、人生の意義も自ら解せられるに至るのであります、可愛い男女の二人の子供を失くした、自然主義の或一人

の文士が、こう云つて懺悔したことがあります、自分は今迄人生を味ひたい、生を味ひたいと、色々様々と苦心をして、態々自ら苦しい嫌やな境遇を造り出してまでも、之を味ふて居たが、身を引裂くよりも苦い目に遭ふては、自ら態々味ふて來た一切の生の意味も、空虚の様な心地がする、可愛い子供を失ふといふ様な事は、自ら求めてやれる様な薄つぺらなものではない、眞の生の意義は、斯ういふ慕ない悲しい所から見出さなければ、當底解るものにはあるまいと長大息した、慕ない慕ないといふのは神の聲であります、永遠の聲であります、慕ないから價值があるのであります、價值があるから意義があるのであります、若しも人生が慕ないものでありませぬならば、其價值も意義も没くなるのであります。

人生の意義と申しますのは、如何に解すべきものでございませうか、伺ひたく存じますのでございませう。つまり、人生の慕ないことを悟りますと、そこに人生の價值が解るのであります、人生の價值が解りますれば、其意義も従つて解せらるゝに至るのであります、現代の自然主義などが、現實を味ふ、刹那を味ふなど、申しまして、現實主義を唱へま

すのも、畢竟人生が墓ないからのことであり、刹那々と申すのは、刻一刻の去來でありますから、其現當の刹那を捕へて味はうとするもので、實は墓ない憫れな考へてあります、現在の刹那は、永遠の刹那であるといふ、永遠現實の意識に自覺せなければなりません、自然主義もこゝまで進んで來なければ空虚であります、刹那即永遠、永遠即現實といふ根本自覺に至りますと、宗教といふ信念實在の人生觀となるのであります。

切に無常を觀じますと、自ら常住不變の觀念が浮むのでありまして、そこに生命の曙光があるのであります。常住不變の觀念は則ち宗教の門でありまして、耶蘇教の神の觀念も、佛教の佛の觀念も、こゝから生じたものであります、又切に無常を觀した所の人々が、出家得道するのも、宗教を信じますのも、是の譯からであります、常住不變の觀念は、實は我の本體が輝いて居るのでありまして、我の本體、則ち『眞の我』が輝くのであります、我は『眞の我』より來たものでありまして、俗にこれを自我と申しますが、之を本體に即して『我神』と申す、故に人々は『我は

神也』といふ無上尊榮の意識を保つべきものであります、人々の心靈は本來からして神でありますから、其神を確に自ら意識するのでありまして、自ら承知をするのであります、耶蘇教の所謂天に在します神ではありませぬ、地上を歩くところの神であります、靈ばかりの神ではありませぬ、肉に宿る神でありまして、肉其まゝ肉ながらの神であります、故に之を『肉神』と申します、豫言者はその事實であります、一たび『我は神也』といふ無上尊榮の意識を得ましたならば、人生の意義も了解されました、則ち人生の意義は『我神』の啓展創造に外ならぬのであります。神の生活を營みまして、自らの内から神を創造して行くのであります、クリエーションとはこの意義を申すのであります、一言に約して之を申しますと、人生の意義は則ちクリエーションであります、デヴァイン、ライフのクリエーションであります。

今日は、人生の意義に就ての御質問でございますか、先づ諸君の有せらるゝ御意見から伺ひまして、その後で、私の御話をするに致したいのであります。

(甲)私は、人生の意義は戀愛にあるかの様に思はれます、若し人生から戀愛を取り去つて了りましたならば、砂を噛む様な乾燥無味の人生となりまして、亞非利加の砂漠中に生理めされましたも同様に存じます人類が往々戀愛のために身を棄て或は情死することの少からぬのは、人生の價值の上に、重大の意味を有する證據であらうかと思ひます、人間の尤も怖れますのは、死より甚しいものはありませぬが、一旦思ひを遂げられませぬ處から、戀無常を觀じますと、五十年の一生を放擲しまして聊も願はず、茭爾として死を悔ひざる如きは、決して他の動物に見ることの出来ない特徴と思ひます、且つ人間の笑ひと云ふものは、全く戀愛表情の進化發達したもので、他の動物に見ることの出来ない特徴でありませぬ。

戀ひは、勿論、失戀と否とを論ずる限りではありませぬ、戀愛其物の眞價は、寧ろ失戀にあるかと存ます、失戀のために狂熱し、戀ひ焦れまして、悶へ死するに至りますならば、絶美の極、是に過ぎずと信ずるのであります、猶又戀愛の成就は、實に社會道義の根本であらうかと思ふのであります、青春の男女間に戀愛を生じまして、其成就を見るや、茲に家庭を作りまして、夫婦が成り立ちます、夫婦は子女を設けまして、父母となり、子女は、兄弟姉妹となるのであります、子女は、更に父母となり、父母は、祖父母となりまして、孝悌友愛の道義が實現されるのであります。

戀せずば人に心もなからまし

物の哀れはこれよりぞ知る

とは、戀愛が道義の根本であることを詠んだものでありませう。

自由戀愛説は、古來からして稱へられましたが、近世に至りましては、此の思想を以て社會組織の根本理想としまして、歐米の社會に於ましては、非常の速力を以て傳播せられつゝあるのであります、蓋しこの思想は、形式習慣等に拘泥せないて、婦人を開放しまして、純然たる愛の結合を求むる理想から生じたものと思はれます、則ち戀愛は愛の實現でありまして、又道義の根本であります、近代の思潮が果して戀愛

は、道義の根本といふまで來て居るか何うかは存じませぬが、私の信ずる處では、こゝまでは漕ぎ附ければならぬと考へます、此の點からして見ますと、戀愛を解するのは、嘆々の中に、人生の意義をも解したものと云つても、差支へなからうかと存じます。

(乙)私は、天地の美妙、則ち自然美に同化するのが人生の意義と思ふのであります、耶穌基督も

野の百合花は如何にして長かと思へ、勞す紡がさる也、われ爾曹に告ん、ソロモンの榮華の極の時だにも、其裝、この花の一に及ばざりき。

實に自然は美しいものではありませぬか、人間は兎角自然に遊りまして、遂に偽善虚飾に陥ります、そうして世の中が没趣味になつて了ふのでございます、人間が自然にさへ同化しましたならば、偽善虚飾は跡を絶ちまして、人間は皆赤兒の狀態に歸へる事が出来ませう、天國其儘になるであらふと思はれます、トルストイも、人生の意義は、地上に神の國を現はす様な事であると申しましたが、多分、此意味であらうかと存じます、古人の語に、英雄の本色は、質朴なるにありとありますが、近世、泰西の文明批評家等が、頗に、自然に歸れ、といつて、自然兒を鼓吹しますのも旨ある哉と存じます、人間社會に藝術が行はれまして、彫刻であれ、繪畫であれ、文學にせよ、音樂にせよ、是等のものがあればこそ世の中の活動を得ませうが、若しこの藝術的趣味を取りますと假定しましたならば、人生の意義は直に没却するものと信じます、ニイチエが所謂天才は學者でもない、識者でもない、如何なる人でもない、則ち藝術家であると申ました藝術家は、取も直さず自然の大産物であると思ふのであります、又所謂失意悲觀から來た厭世家なるものが、儼に自殺を免れて生存することを得ますのも、全く自然に沐浴して自ら慰する所あるが爲めと思ひます、思ふて茲に到りますと、自然が人事に及ぼしつゝある勢力は、まことに意想外でありませう、果して然らば人類が、自然に同化しつゝ生活するのは、則ち人生の意義の存する所と思ふのでございます。

(丙)私は、靈魂不滅の意味の上から、人生の意義を認めやうと思ひます、則ち社會のために、感化を遺す

所にあると信じます、人間の肉體は、五十年かそこらで消滅に歸しますけれど、其精神は、千年も、二千年も後世に永綴活動しまして、幾多の人々を感化することが出来るのであります、是れ素より人々に依りまして、各々其差等を生じまして、精神の弱きものは、死後殆んど跡形もない有様になり果てまして、所謂醉生夢死の生涯であります、少し強いものは、其感化、數百年にも及びますし、其強大なるものに至りましては、二千年も、三千年の後迄も及びまして、猶其盡るの時を知らざる勢力であります、例へばソクラテスや、孔子の如き人物は、則ちそれでありませう、是等の人物は、既に數千年前に没しまして、今は其形骸に接する事は出来ませぬが、其精神に至りましては、聊かも減ぜず愈々年代を経るに従ひまして、其感化は強大となる勢であります、其遺書を讀み、或は其傳記を調べますと、直接其人に接しまして感化を受けると同様に、後世の人類を薰陶鎔冶する力は實に驚くべきものがあります、是則ち靈魂不滅の理でありまして、精神力が萬古に活動するのであります、されば充分に精神を活動せしめまして、出来る限り、後世に感化力を遺すことに努力しますが、人生の意義であらうかと信じます。

(丁)私は、人類は到底動物たるを免れませぬから、動物的性慾を満足せしむる上に於て、人生の意義を認めればならぬと考へます、人は萬物の靈長と申すけれども、其性慾の旺盛なることは、禽獸に優ること幾倍なるを知らずといふ有様であります、彼の禽獸の欣々然として自由自在に、其性慾を満足しつゝあるを見ましては、人類として羨まざるを得ぬではありませんまいか、人は道徳だの、道義だのと云つて居ます中に、彼の冷たい墓場に眠らねばならぬ運命が、矢の如く襲ひつゝあるではありませんまいか、嗚呼人生僅に五十年、短い生涯に於きましては、まさに狼の如く、獅子の如く、其性慾を満足させまして、戀愛でも、自然美でも、權勢でも、富貴でも、何であらうと彼であらうと、己が欲する所は、凡てこれを満足するでなければなりません、小野小町でも、楊貴妃でも、クレオパトラでもよろしい、三井、岩崎や、セシロローツも、ナポレオンも、太閤もよろしい、或は詩歌であれ、文藝であれ、有ゆる藝術であれ、遠慮は

ありませぬ、其慾望を満足する所に、人生の幸福はそこに存在するのであります、若しそれ性慾の満足のため、死しますならば中途にして斃れましたならば、其人に取りましては本望でありませう、アナクレオンの如きは、性慾満足中に即死するのが人生の最大幸福であると云つたでありませぬか、嗚呼本能満足なる哉、性慾満足なるかなです。

(戊)私は、丙君の主張された意義に賛同を表しまして意見を申し上げます、人生の意義は、人々が各々有する所の理想を実現するにあるかと存じます、理想なるものは勿論、眞、善、美でありませう、この眞と、善と、美とは元來無限でありますから、到底之を悉く實現し得ることは望まれませぬが、出來得る丈、それ丈實現せねばなりません、人類は、動物の一種に相違はありませぬが、また萬物の靈長として特種の心理を備へたものであります、動物的以上に超脱することを得るものであります、則ち理想を實現するといふ事は、他の動物には、決して望むことの出来ない人類特有の事實であります、先に孔子や、ソクラテスの諸賢哲に例を取られて、精神不滅の理を御話になりましたが、其精神力の後世に及ぼす感化は、全く孔子、ソクラテスの人格の感化でありまして、孔子、ソクラテスの人格は、凡人よりも多く其理想を實現した高尚なる人格であります、それ故に人格を高尚にすればするだけ、精神的感化が廣く永く及ぶものであります、非常に向上しますると、遂に、後世幾千年間に生息する幾億萬の人々を感化薰陶するに至るものであります、ソクラテス孔子の肉體は、既に百年足らずに無くなりまして、其精神は、數千年後の今日にまで及びまして、猶感化の止まることを知らぬのは、則ち動物的以上に超脱したものと云はなければなりません、凡そ人間一生を終りまして、假令百年にもせよ、二百年にもせよ、感化を後世に遺しますのは、人格の向上した結果でありまして、理想實現に外ならぬのであります、則ち人たるものは、其理想を實現し、又實現しまして、歩、一步、愈々高尚なる人格を發達せしむる事に専ら努めますのが、人生の大意義であるまいかと存じます。

(六七)

種々なる御説を伺ひましたが、豫言者の齎らしました新福音は、總て諸君の望まるゝ所の一切のものを満足せしめ得て、猶且つ餘りありと思ひます。

丁君は性慾の満足、本能の満足を以て人生であらうと主張されますし、甲君は戀愛を以て人生の目的と考へられるが、本能といふのは、豫言者の直觀から申しますると、人間本然の性情は勿論のこと、自我の本體、即ち『眞の我』の發動とも申すべき深い意義まで含まれて居るのであります。此の意味から道德も即ち本能であります、道德即本能であります、また宗教心も本能であります、宗教即本能であります、儒教の方で惻隱の心と申しまして、性善を主張しますのは、即ち本能即道德の意義から來たものであります、故に本能は『眞の我』から出た衝動でありますから、神聖であります、本能神聖であります、性慾もまた其如く、性慾は我が個體肉保存は勿論のこと、深い、遠い、大きい人生肉の生々存続の要件として、峻烈なる衝動を起すものであります、是れなくしては人生の存立が保てませぬ、性慾は人生存立の必須要件でありますから、最も神聖なるものであります、性慾神聖であります。

斯の如く本能神聖、性慾神聖の意義を自覺した上に、これが満足を求めますのは、人間の義務であり、責任であります、然しながら人生存立の爲に、必須要件なるだけ其衝動が餘りに峻烈でありますから、害毒に陥り易い傾向を持つたものであります、本能神聖、性慾神聖の自覺がなくて、單に本能のまま、性慾のままに満足を求めましたならば、其間に必ず罪惡を構成するに決まつて居ます、下等動物には、本能性慾に一定の嚴然たる限度がありますから、其限度を犯かすの恐れがありません、由て従つて罪惡の構成もありませんが、人間は一切に於て大自由でありますから、何等天然的の限定がありません、そこで稍々もすると害毒に陥り易いので、罪惡を犯すに至るのであります。

世には、一步を誤れば忽ち罪惡に陥るやうなものが、何うして神聖なものであらうかなど、考ふる人も少からずあります、一步過ぎると、罪惡に陥るほどのものであるからこそ、神聖であります、罪惡の裏面があるからこそ、神聖であります、抑も罪惡と申すものは、最高生活に於て始めて伴ふ所のものであります、最高生活、即

(七七)

ち自由の生活に於て始めて見る可きものであります、罪惡の裏面をひかへて居ない生活は自由の生活ではありません、従て最高の生活ではありません、されば最高生活、即ち自由の生活には、必ず罪惡の裏面がひかへられて居るのであります、茲に神聖といふ自覺が始めて生ずる譯であります、自由なるが故に罪惡がある、罪惡あるが故に神聖があるのであります、大自由最高の生活を營む人間に限りまして、始めて神聖の自覺が生ずるのであります。

此の神聖の自覺が出来て、始めて制慾の克己が成就されるのであります、夫れ神聖は犯す可からざるものであります、神聖なるが故に犯す可からずであります、此の自覺が出来て、始めて性慾満足の義務と責任とが完ふされるのであります。

甲君の所謂戀愛なるものは、この性慾から生じた方便的誘導の性質でありまして、決して目的ではありません、恰も食物に於ける味ひの如きものでありませう、牛肉は旨い、鯉の刺身が旨いと云つて食つて居ますのは、旨ひ爲に食つて居るやうなもの、實は我が身體の營養の爲に食ひつゝあるのであります、旨くなければ食はな

い、食はなければ身體の營養が出来ないから、營養に適するものは、自然に旨いといふ味ひが附いて居るのであります、戀愛もまた斯くの如して、人生の生々存續の爲に、恍惚として酔へるがごとき魔力を興へられたものであります、左うてなければ、人間が性慾の發動に従はなくなると人生の存立が危くなるから峻烈なる衝動を起すために、戀愛といふ旨い味ひを附けられた者であります、されば旨いからと云つて貪るべき者ではありません、性慾は神聖であるとの自覺に立つて處すべきものであります、戀愛の神聖については、すつと以前から言ひ古してあります、世には戀愛神聖論に反對する人も澤山にあります、其言ふ所を聞くと戀愛は神聖でない、戀愛は情慾性慾が基礎となつて居るから動物的である、神聖など思つて居るのは若年輩の迷夢であると、何ぞ知らん其基礎たる性慾は、神聖であります、神聖、豫言者は之を絶対に宣へるのであります、性慾が神聖である以上は戀愛も従つて神聖でなければなりません、戀愛の神聖といふ事は、性慾神聖に附帶した神聖であります、そこで戀愛の神聖とは、苟も犯す可からざる事を意味したも

のであります。

甲君の如く、世の中に戀愛がなかつたならば、砂漠中に生埋めされた様だと申されますが、戀愛の衝動は斯くまでに峻烈でありましたも、それが直に人生の目的と云ふべきものではありません、如何に鯛の鹽焼きが旨いからとて、それを食ふのが目的ではありませぬ、前に申しました通りに、食物を取るのには、身體の營養に供する目的から成り立つて居りませう、その如く戀愛その者が目的ではありませぬ、戀愛は人生の存続の爲に生じた方便作用でありまして、近い目的は夫婦の成立であります、戀愛の神聖からして、夫婦は當然一夫一婦であります、戀愛の力の峻烈なるだけ、人生存続の如何に意義あるかを解りませう、人生存続が斯くまでに意義あるからには、人生の目的、其目的が如何に高い、大きい、深いものであるかを知らなければなりません。

古より神といふ思想は、野蠻と、文明との差別なく、何れの人民の腦中にもありましたもので、この思想、則ち神の思想の有無が人類の他動物に比しまして、全く相異なる一大特徴であります、人は萬物の靈と申すのも、畢竟、其根原はこの神の思想から出たものでありまして、人は萬物の靈と申す自覺は、誠に意味深長と言はねばなりません。

神の思想が浮びますのに、昔しから誤謬に陥りがちの傾向がありました、兎角我以外にあるもの、如く考へまして、耶穌教の如きは、神が、萬物を創造したと教へまして、我以外、我以上のものとするのであります、この誤謬が、遂には偶像教に陥るの原となりますのは、まことに止むを得ぬ譯であります、耶穌教の方では、獨一眞神ばかりを信せよ、偶像を拜するな、偶像を拜すのは罪であるぞと云つて、昔から堅く戒めてありますけれど、それでも偶像に陥るの弊が少なからず起つて居るのであります。佛教に至つては、非常の事でありまして、一方に經文の理窟はありますけれど、實際に於ては混亂滅裂、敢て收拾す可らずであります。

(一八)
畢竟するに、この神を我以外に認めんとしますのは、現象界、則ち有限界に住する人類の弱點でありまして、明哲智識も免れなかつた通患であります、兎角我を客觀

に見たがるのは、妙齡の少女が、常に鏡に對せんとするのと同様な心理状態であり
ますが、其映つた姿を以て、我が身ではない、我身以外のものであると考へますの
は、滑稽の沙汰ではありませんか、猿猴に鏡を見せると、自分の姿を映して居るこ
とに氣が附かないで、怒つたり笑つたりして騒ぎ廻りますが、從來の宗教は、ま
だ宗教の猿猴時代と申すべきであります。

可憐に注意すべきことは、其偶像なるものが、如何なる形をして居るのであるか、
驚くべきは、皆人體を俱へて居ることあります、中には下等動物、其他の形もあ
りませうが、是れとても、其靈力は、矢張り人的靈力を備へた神になつて居ります
結局、偶像は全然人體的であります、人體的でありますから、耶蘇教にては、獨一
神と衝突するので、神を汚すものとして偶像崇拜を嚴禁するのであります、然しな
がら、耶蘇教徒が、其開祖耶蘇基督を神として尊信しますのは、偶像崇拜の最も甚
しきものではありませぬか、耶蘇教徒は辯明しまして、神は父であつて耶蘇は子で
ある、つまり三位一體、同一であると申しますが、此の辯明は耶蘇教の爲めの辯明

としては、取るに足らぬ没道理でありますけれど、反て我が『肉神』を辯明し得て餘
りありてあります、耶蘇教徒の基督に對する信念は、則ち豫言者の『肉神』に於ける自
覺であります、禍ちを見て仁を知りて、迷信の中に反て眞理が見出さるゝものであ
ります、畢竟するに偶像は勿論のこと、耶蘇教の神も佛教の彌陀も、共に人格的で
あることは明かなる事であります。

この人格的の神は、我以外に存するものではありませんか、我といふ我が則ち人格であ
りまして、此の人格なる我の本體を指したものであります、そこで神は我の本體で
ありまして『眞の我』であります、從來の宗教は、皆この『眞の我』を無理と我以
外に放逐して禮拜したものであります『眞の我』を自覺すると云ふ意義は、自ら尊
び自ら重するのであります『我は神也』と自ら承知するのであります、諸君『我は
神也』といふ意識ほどの無上尊榮が、宇宙間に於て二つと有り得ませうか、唯呼尊
ひ哉、諸君の心霊は其まゝ神であります、本來からして神であるのであります、そ
の神は當り心霊ばかりの神ではありませんか、心霊肉體を通じての『肉神』であります

(四六)

から、其性慾は、悉く神聖であります。

『我神』を尊び、また互に『我神』を尊むべし、是れ豫言者が齎らしました訓誡であります。『尊む』は敬愛の意義でありまして、無上尊榮の自重と、盡十方周遍の博愛であります。

昔は、神が、天地と人間とを造つたそうですが、現代は人間自らが神と、天地とを創造す可き新紀元であります。従來の宗教は、神と人間との相對的宗教でありましたが、豫言者の新福音は、神それ自身の絶對的宗教であります。人間といふ動物が、自ら神を創造するの新紀元を開くのであります。自我の絶對創造であります。斯くて神の新生活を啓くのであります。

『我神』を意識しまして、『肉神』となりまして、この物質世界に於ましては、神の生活をやつて行くのが容易ならぬ事と思はれます。則ち物質と心靈との衝突を來しまして、非常の苦痛を起し、到底、凡人には耐へられぬことかと思はれます。

その嚴平として行はれますのが新福音の力ある所であります。勿論有ゆる苦痛、煩悶、罪惡が消滅して了ふといふ意味ではありませぬ、苦痛、煩悶、罪惡は反て益

々威を逞ふして逆襲するであります。神の自覺は、之を征伏し得て餘りあるのであります。古へより幾多の聖賢が、如何に苦痛を忍び、如何に迫害と戦つたかを見玉へ、幾多の義人が如何に血を流し、如何に肉を裂けるかを見玉へ、孰れの胸中も光風霽月、それ相應の満足、それ相應の平和、それ相應の慰安を得たてはありませぬか、況んや『我は神也』といふ無上尊榮の自覺を以て、苟も神の生活を營むに當りまして、若し肉を鋸られ、骨を碎かるゝの迫害に遭ひますならば、生活の榮光何物も是れには及びませぬ、生命を惜み、苦痛を怖るゝの徒はクリエーションに叶はぬものであります。血を以て色とられ、刃を以て形らるゝ『肉神』であります。

諸君、如何に幸福を望み、如何に快樂を望み、如何に無事を望むと雖も、最後に於て到底、死の苦痛を免るゝことは出来ませぬ、人生は、畢竟苦痛を意味するのであります。其苦痛の人生を、其儘靈化して、征伏して、超脱するのが『肉神』の力でありませぬ、斯くの如く、人生の苦痛、煩悶、罪惡を靈化し、征伏し、超脱して努力するものが神生の創造でありまして、偏に人生の價趣を茲に味ふ可きものであります。

(五八)

それは苦痛も、煩悶も、罪惡も、みな悉く神の生活に飲ぐ可らざる必須要件であるからであります。是を以て『我神』の意識は、崇乎としてこの妙境を創造するを得るのてあります、もし夫れ人生に於て、苦痛も、煩悶も、罪惡もなかつたならば、人生の價值も意義も歸趣もあつたものではありませぬ。

第十章 祈禱、瞑想、禪、反省、修養、自力、他力

或人問ふ、私は、元クリスト教會に屬して居りましたものでございます、クリスト教では、神に祈禱をすると云ふことがあります、この祈禱の事が何うしても私には解りませぬ、先年、母が大病に罹りまして、醫士もヒを投ずるといふ場合でありますから、私も一生懸命になりました、晝夜の看護は勿論、神様へ對しましては血涙を揮つて熱禱を捧げまして、五週間以上に渡りましたが、何の靈驗もなく、母は空しく没しましたのでございます、それから祈禱といふ事に疑ひが生じまして、其後、友人が虎列刺病に罹りました時にも、愚妻が肺炎で九死一生の際にも、更に祈禱を致しませぬのでございました、が孰れも共に平癒しまして、今日まで無事に生存して居ます、耶蘇の教師にも話して見ましたが、大能者の御意は、人類には解からぬから、唯御旨に任せ奉らねばならぬといふ一點張りで、要領を得ませぬ、佛教は、何事も因縁因果と諦めまして、別に祈も用いませぬが、儒教の天命と同じ譯で面白いかとも思はれます。

或有名な耶蘇の教師は、神に對しては疾病平癒など祈るべきものではない、唯自分の心の弱きに力を賜はる様に、道徳的勇氣を與へらるゝ様に祈るので、肉體の事は單に感謝に止まると申されましたが、私は思ひますのに、祈禱は誠心の求むる叫でありますから、決して肉體と心靈との差別はあるまいと存じます、心靈上の祈を聴くの神様は、また肉體上の祈も聴かねばならぬと存じます、心靈上に力を與へられる様に祈りまして功驗のないのは、禱の熱心が足らぬからと致しますならば、肉體上の祈りの聴かれぬのも、熱心が足りないからとせなければなりません、母の病氣のために祈りました私の祈は、私の祈りの極度でありました、あれ以上は、到底私には祈られませぬ、私は結局祈禱の子となることの出来ない、薄弱いものでございませぬか、弱ければこそ祈りも致しますのに、祈の熱心が足らぬからとて、聽上げて下さらぬのは

神様も無情と云はねばなりません、私の如き弱者は、生れながらの亡びの子でありませうか、祈るも祈らぬも、つまり祈禱の資格がないのでありませう、世間には、私の如き弱者が少くないかと存じます、皆亡びの子でございませうか。

弱者には聴かないで、強者にのみ聴いて下さる神様は、此の世に於ては無用かと存じます、此の世が既に、弱肉強食でありますのに、キリストは弱者は來れ力を與へん、哀める者は來れ慰めを與へんと、出來ない注文を引受けられたけれど私の如き弱者には、何物をも與へられませぬところを見ると、キリストも頼みになりませぬ、實際世間を見ますと強者ばかりは愈々力を與へられまして、必用のない所にまで與へられて居ます、樂める者にはいやが上にも慰めを與へられまして、私の如き哀める者には、いよく益々哀を益すの外、何にも與へられませぬ、キリストの語に、それ有る者は予られて尙餘あり、無有者はその有る物をも奪るゝ也とありますのは、茲の事でございませうか、ア、神様もまたヘロデ王の祖先に相違ありませぬ。

私もそれには御同感であります。

神といへば、是まで木や石にてこしらへた偶像であるとか、または目に見えない方から申しますと、基督教のいふ神様のやうな、天に居ましたり、天地萬物の外に居ましたり、兎角、我が心を離れて存在するものと信せられたものであります、斯の如く、我が心を離れて、我の外に神が居るとの信仰は、昔からの古くく信仰でありましたが、耳目五官に制せられ勝ちな未開朴素の信念の遺傳が、やつと今日まで

續いたものでありまして、最早や形骸を止むるばかりに過ぎないのであります、從來は、神が我心の外に居ると思ふて居ましたから、佛教でも、耶蘇教でも、天に祈禱をしたり木像に念佛を唱へたりしたもので、神に祈禱をこらし佛に稱名祈願をかくると、その人々の熱信相應に感應功德があるやうに信せられたものであります。熱心に祈禱をすれば、感應があり、熱心が足らなければ感應がない、と云ふことに注意せなければなりません。若し神が天に居り、佛が地に居るならば、たとひ熱心が足らなくとも、その人に相應の満足を與ふるだけの感應がある可き筈ではありますまいか、熱心が足らねば足らぬほど氣毒な人でありますから、祈るところか知らずに居ても、その人の幸福のためには、神様や佛様が世話をやいて呉れねばならぬ譯でありますまいか、然るに熱心をこめて祈禱をしても、一々聴いてもらへぬとあつては、頼もじからぬ神様や佛様でありますまいか、祈禱といふ事は、基督教などの方では信仰の根本生命としてある位で、最も大切なことになつて居ります、天の父よ、神様よと、熱心に祈禱をすれば、忽ち感應があつて、心に平安が來り、また

非常なる力を與へらるゝものと信せられて居るのであります。

彼等が信ずる如く、果して天に神様が居り、地に佛様が居るてありませうか、果して念佛を唱へ、祈禱をすれば感應があるのでありませうか、天の神や、地の佛に對して、御相談を申すことを祈禱といふて居りますが、實は、われが我が心を確めるのでありまして、強めるのでありまして、我と我が心に相談をするのであります、何事でも唯考へたばかりでは、ハッキリしませぬが、その考へた事を口にて言ひ、言葉に表はしますと明確になつて來るものであります、祈禱は、我が願ひ、我が希望することなど言葉に表はして確め、言語に演べて強めるに外ならぬのであります、儒教の自省は、即ち祈禱であります、三たび自ら省みると云ふのは祈禱であります、孔子が丘の禱るや久しと云つたのも、この意に外なりません、佛敎の禪もこの意味であります、自ら省み、自ら瞑想をして、修養に努力するのは即ち祈禱であります、されば天に向つて祈禱をするが如きは、古い幼稚な宗教の誤つた習慣でありまして、迷信の遺傳であります、然らば則ち須らく我に向つて、自我に對して祈禱を致す可き

ものであります、自己祈禱であります、自己禮拜であります、我れが我に向ひ、自我が自我に對するのが眞正の祈禱であります。

また佛敎が云ふ如く、耶蘇敎が主張する如く、果して天に神様が居り、地に佛様が居ましたところで、我の外に、自我の外に別居して居ますならば、何等、我と關係はないものであります、天の神、地の佛、我と何の係はりあらんやであります、天の神も、地の佛も、畢竟無用の長物に過ぎないのであります、又たとひ神様が祈禱を聽いて呉れ、地の佛様が念佛祈願を聽いて呉れたとて、我に於て何の用があるてありませう、何の得るところが有るてありませうか。

佛敎徒、殊に耶蘇敎徒は申します、神に御祈禱をすると大に安心が出来る、わが罪は容るされ、わが汚れは清まる、また非常なる力を與へらるゝのであると。

豫言者は申す、神様に御祈禱をして、安心を得たからとて、それが何になりませうか、天の神様から我が罪を容るされたとて、それが何の罪滅ぼしになりませうか、天の神様に清められたとて、それが何の清淨てありませう、たとひ又非常なる力を與へら

れたところで、その與へられた力が何の役に立ちませうか、我は我自ら安心を得、我は我自ら清まり、我は我自ら力を得なければ、何の役にも立つものではありませぬ。

豫言者曰く、神様によつて清まり、神様によつて安心を得、神様の御蔭によつて力を得ましても、それは神様の働きてありまして、我自らの働きてはありませぬ、今や、神様に依つて安心をしたり、力を得たり、そんな呑氣な眞似をして居れた時代は過ぎ去りました、たとひ神様が安心せろと言ふところで、それが安心とならう筈はありませぬし、神様が力を與へると宣ふところで、それが何等の力ともなる可き筈はありませぬ。

更にこれが實行の方面にあらわれた道徳上に於ても、同じ譯であります、神様が善を行はねばならぬ、人の行爲は、善を以て律せなければならぬと宣ふところで、我は、其命令の爲に善を行ふべき理由はありませぬ、假令神様が惡を爲せと宣ふても、我は、善を行ふ可きものでありませう、神様の意志、神様の命令であるから、

善は行ふ可きもの、不善は避く可きものではありませぬ、神様の意志はどうであらうと、神様の命令はどうであらうと、我は我として善を行ひ、我として不善を避く可きものであります。

神様の意志や命令など、顧みるの必要もなければ、そんな暇もありません。我は絶對自由者であるのであります。

第十章 新宗教と神

或人問ふ、宗教の眞理とは、如何なる點にあるのでございませうか、ヘーゲルの如きは、宗教は、圓滿なる自由であると申ましたし、カントは宗教は則ち道徳といふ説でありまして、當今に唱へらるゝ倫理則宗教論と二致ないのでございませう、フヒヒテに至つては宗教則ち智識にして、宇宙萬象の本源に對する最大問題について満足を得せしむる智識也と主張しました、之を概言しますれば、宗教則自由、宗教則道徳、宗教則智識の三者となりますが、孰れも餘り單純でございまして感服が出来兼ねます、宗教なるものは、モ少し深遠なる眞理が含まれて居やうかと思はれます、斯の如き大哲人が孰れも單純簡短な、乾燥無味な定義を下しますのには、驚かざるを得ぬのであります、私は何うしましても、是等の定義にては承知が出来ませぬ。

現今は、我國にも幾多の諸宗教が渡來して參りまして、其判明に苦む次第でございしますが、然しながら滅多無生に天帝に禮拜し、又無暗矢鱈に天帝に祈禱を捧ぐる耶蘇教の如き、無念無想の野狐禪か、他力念佛の馬鹿げた佛教の如き、其他何教何宗に限りませぬ、いづれも從來の宗教にては、到底心盤上の満足を得る譯にまいりませぬ、それでありませうから、何處までも求めくままして、深く宗教の眞理を探らんと存じます、願くは先生の御説明を得まして、眞理の有處を承知致さう存じます。

宗教と云へば、すぐに從來の既成宗教を聯想し、拘泥しまして蠟燭を灯けるやら香をたくやら、經文を讀みあげたり、祈禱をしたり、念佛をしたり、そんな事ばかり思ひ出して、何か神佛の偶像がなければならぬ様に、また目に見へなくとも、何に

か目當にする無形の神様が客觀に居なければならぬ様に考へて居ます、其癖、そんな人が心から神様など求めて居るかと云ふに、全く神や佛の必用を認めて居るのではありません、今の世でも、神や佛を頼みにして居るものも無いではありません、それは成田の不動様だとか、笠森の稻荷様だとか、金が儲かる様に運勢が開けるやうに、家運長久、延命安全を祈るに過ぎないのであります、最も耶蘇教といふ者はそんな物質的要求の爲でなしに、もつと高尚な精神的慰安の保證として神様を信じて居ませう、この種の人の、神に對する觀念の基礎を叩いて見ると、人間は弱いものである、旻天に號叫すると云ふやうな、言ふに言はれぬ心の要求を持つて居る、人力の及ばぬといふ時に、忽ち此の心が發揮して神に祈るといふ心持になる、これが自然であつて人間の持前であるといふ様な考へてあります、その言ふ所が、人間自然の心の叫びのやうに申しますけれど、左ふいふ人が果して朝な夕なに神に祈禱をして居るのでありませうか、それすら覺束ないかと思ひます、又それ位の事は、廣い世間の耶蘇教徒の中には多少ありませうが、所謂心の奥底から叫ぶといふ

熱血の祈禱をやつて居る人が幾人ありませうか、彼等が人心自然の發動の如く云い
なす其物が、既に一片の理屈に止まるのであります、理屈でない理屈をつけて自ら
説明して居ながら、何も熱心な祈禱も出来ない、祈禱をする氣にもなつて居ないの
てあります、それが理屈でない理屈に囚はれた證明であります。

この尤もらしい理屈でない理屈が危いのであります、本氣になつて熱禱を捧げて居
るものが幾人ありませう、恐らく一人もあるまいと思はれます、天に神があるといふ
信仰が本統に心に燃へて居ますならば、今日の耶蘇教者の様に、醉生夢死の生活を
して居れる筈がありません、昔は随分熱心な本氣な信仰を持つて居た時代もありま
したが、現代となりましては、既に既に信仰として成立たなくなりました、既に力が
なくなつたのであります、生命が盡きて了つたのであります、天に神が居るなど云
ふ信仰は、數千年前の未開の遺風でありまして、現代はそんな信仰に活きる事の出
來ない、遙に強いく自我の生活に入つて來たのであります、それでありませうから
現代に於ては、本氣に血の汗を流す様な、血の涙の滴るやうな祈禱を行ふ事が出来

ないのであります、昔は穴居と申しまして、土中に住ひをして居た時代もありまし
たが、狐や狸は知らぬこと、最早や人間は土中に住居する事が出来なくなりました
丁度それと同じやうに人間の心靈が進化して參りました。

ヘーゲルだの、カントだの、フヒヒテだの何とか彼とかと、小理屈を言ひますけれ
ど、彼等は哲學者といふ理屈屋に過ぎないもので、宗教を何う斯ういふ資格はあり
ませぬ、言ふのには差支へもありませぬが、解りもしない癖に色々言ふて見るのが
むしろ可愛いのです、今の學者、或は宗教家に向つて、宗教とは何んな者であらう
か、何んな事を云ふのかと尋ねますと、宗教とは、神と人との關係である、絶對と
相對との關係であると、人が神を拜み、相對者が絶對者に歸依する事の様に、而も
それが萬古不易の原理であるかの様に即答をします、何と滑稽の沙汰ではありませ
ぬか、是れ迄はそんな下らない解釋で行けたかも知れませぬが、豫言者が出た以上
は、こんな陳腐な杓子定規は斷して容しませぬ、豫言者は彼等の所謂萬古不易の原理
を蹂躪し、破壊し、茲に新信念の妙諦を提げて、絶對的救済を成就するのであります

ず、天に神が居るでもありません、地に佛が居るでもありません、然らば、神や佛は何處に居るでございませうか、豫言者宣べて曰く、自我は即ち神であります。

神とは、一体どういふものを指して申すのでございませうか、神の神といつた様な御説明を願ひたう存じます。

神は説明するべきものではありません、何とも説明が出来なくて、唯一言、神といひ得るに留まるのであります、何とも云へないからとて何とも言はずに居られませぬから、神、と一言云ひあらはすのであります、世間で、何とも云へない善い意味を現はしますのに、妙と申します、丁度この妙といふ意味の現はしと同じ様なものであります、絶対實在に對して、離言不可説の心を言葉にしたものであります。

神は、既に天にも居らず、地にも居りませぬ事に決りましたならば、自我を以て、必ずしも神とせな

ければならぬ譯でもありません、存ますが、人、或は聖人位でもよろしくはありますまいか。

今申します通りに、自我を以て、神とするではありませぬ、神といふより外に、言葉がないのであります、自我といふ自我は、絶対者、無限無究者、根本的實在者、或は永遠、或は無始無終、眞の極、善の極、美の極、そうして生命の根本であります。

して、人格の完局であります、天地も宇宙も其一部に過ぎない、それです、不可思議も神秘も、何も彼も一切の抱藏であります、これでもなかくに言ひ盡せて居ないのでありますから、一々言ふていつたら、一生涯かゝつても言ひ盡せません、そこで唯一言、神と申すより外に言ひやうはありませぬ、また神と申せば、有ゆる人間の言語を積み重ねて言ひ現はすよりも、遙に、優つた、何とも言へない幽韻の響きが心に感ずるのでございませう、自我が神でありますねならば、人間の言語の中に、神といふ言葉はない筈であります、またあつた所で、斯くまで幽韻

微妙の響きを感じずるものではありませぬ。

この神を自覺して生活するのが、眞の宗教であります、自我の本體は、即ち神であると自ら承知をしまして、刹那を創造しますのが神の生活であります、そうして此の神は、生民あつて以來、未だ人生に造られて居ませぬから、之を遺憾なく創造しなければなりません、それを創造しますのに、個人個人の個性に従ふて個性の特色の上に、個性の儘創造するのであります、それには相應の努力をしなければなり

ませぬ、豫言者は之を稱して神生と申します、即ち神生クリエーションであります。此の譯柄を心の底から納得しましたならば、そこに神の生活が營まれるのであります。この神の生活創造こそは、まことに宇宙絶対の生命であります、豫言者は取も直さず此の生命の活現であります。

クリエーション終

クリエーションに就きまして

我々人間には肉體と精神との二つを具有して居ることは、いかなる人も疑はないてありませう。この二者の關係というやうな、六ヶしい哲學上の問題は他に譲つて、そんな所まで深入りせず、この二者に就て考へて見たいのです。

極、大雑ばな云ひ方ではあるが、二者は多く矛盾し勝ちてあります。吾々の精神の奥底には何か深い、崇高な壯麗な、靈的な或物を要求するものがあります。それは吾々を高い方へ導いて行くもので。これに反して肉體の方は、これにつれて進まない、それとは反對の方へ陥つてゆくやうに見えます。普通にいふ靈肉とは、この反對矛盾を示したものでありませう。そして普通には肉體的な要求が、たゞ低い方へ吾人を導き、精神の靈的な作用要求を障害し勝らだといふ。これまでの宗教家は、この場合を見て、靈的要求を障害する肉體要求を切り捨てよ、肉的要求の依りて來る肉體を苦業せよ、と申します。ところで吾々は精神と肉體との二つを具有して居

ますから如何ともし難い。吾々は精神ばかりで生きられるものでもなければ肉體ばかりで生きられるものでもない。どちらか捨てることはできません。

精神的要求といふも、肉體的要求といふも、要するに、この自分の身體からだからの要求であります。他人の要求でもなければ人間以外のものの要求でもない。たとへばこれを吾々の頭あたまの中に就て考へて見ても面白い。同じ頭あたまであり乍ら、一方神々しい神様のことも考へられ、一方醜い悪魔も考へられます。正反對のことが考へられるのであります。しかもこの考へ(思想)はどちらをとるもよろしい。その人の自由であります。同じ頭で正反對のことが考へられるといふも、時間的には、即ち同時に考へられませぬ。少なくとも神を考ふる間は、悪魔を考ふることはゆるさなしいし、悪魔を考へると同時に、神を考へるといふことは、巖密なる意味ではゆるされなしい。どつちかの一つをとつて居らねばなりません。だから同じ頭の二つの考へ方だともいへる。即ち一つは、靈的要求より來る吾人の考へ方であり、他は肉的要求より來る考へ方であります。果して然らばこの兩者の關係如何。吾人は、靈肉二者の

關係を考へませう。やがてそれは神と、悪魔との關係となりませう。さて、それが關係を見る前に、自由の義——僕の意味する——を考へねばなりません。茲に自由の六ヶしい倫理上、哲學上の解釋は省く。勿論普通の意とも異なります。

然らば、吾人のいふ自由とはどんなものか。吾人のいふ自由には、第一に、吾人の進化といふことを假定して居ります。吾人人類の退化、墮落は、吾人人類の滅亡を意味するものであります。その自由は、墮落の底に沈むための自由ではない。より以上の文明進化を見んために與へられた自由であります。これを例にとつて見れば現代は吾人人類が青年期に達したのであります。これまでは小兒の時代で、萬事、親がかりの世話や保護やら、を要したのが、一人前となつて、親の手から離れた時でありませう。即ちそこに自由は與へられた。其の青年は思ふまゝに振舞つてよろしい。が、よく考へて見ると、その青年は墮落するために、放蕩するために自由が與へられたのぢやない。その青年が、寧ろ親よりも秀れたもの、進化したものになるために、自由が與へられたのであります。即ち自由とは、やがて進化とい

ふこと、よいものになるといふことが含まれて居るのであります。吾々は、神にもなれるし、悪魔にもなれる自由があります。果して然らば、吾々は、いつれに進むべきか僕のいふ自由には、退化は寸分もゆるさぬ。「墮落」なんどいふことは七里結界、吾人の破滅を意味するのであります。

もし、肉、悪魔を、人より切り離せといふものありとせよ。かくの如き論者は、人に自殺せよといふと同じであります。角をためて牛を殺すの類である。吾人の靈といひ神といふも、肉、悪魔から出て来るのではありませぬか。肉なしに靈はあり得ないではありませぬか。それにかはらず、靈はなくとも肉はあり得る、たとひそれが獸にせよ。靈ばかりの者がありとせば、それは幽靈であります。共に人類とは無交渉のものであります。肉の要求が統一され、醇化^{ヒライン}され、進化されたものが靈ではないか。肉、悪魔そのまゝ、我精神によつて救けて靈とし神とせねばなりませぬ。肉身のまゝ、木工のまゝ久遠の如來、久遠の基督とならねばならぬ。これはいかにして得らるゝか、大自由の力によりていあります。我本來の面目を知ること

よつていあります。「我神」の自覺によりていあります。進化の努力によりていあります。この努力を名けて豫言者はクリエーションと申される。自由は我にある。勇氣ある自由の子は、即ち神であります。

かくして靈と、肉とは、不離の関係がある。決してかけ離れた、化物ぢやない。しかしそこに生^{なま}なものと、統一精醇の手數を経てあるものとの差あることを忘れてはなりません。肉が、統一精醇されて靈となるには、その間に、一つの強い力を要する。火が要るのであります、しかもその力、その火は、何人も所有して居るのであります、が、ことなきを好む常人は、その強い力の發現を恐れるのであります。しかし、豫言者は決して安逸を許されませぬ。各個人は、自己の所有せる力をあらはし、その火を燃やさねばなりません。その火によりて怯惰なる心を焼きつくさねばなりません。そこに神の自覺起き、努力生ず、これを創造と申します。我大自由の心は、終に我身をして我神となすのであります。この大自由に遊ぶものゝ心は、他と異つた相^{すがた}に見えます。その心の奥底にひびく聲は、自らにも絶對の聲ときこえ、

(六〇一)

絶対の相をとるのであります。

明治四十四年十月

井上定次郎

明治四十四年十月三十日印刷
明治四十四年十一月二日發行

定價金貳拾五錢

著者 宮崎虎之助

東京市神田區錦町三丁目廿四番地

發行者 關金治

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷者 畑中爲之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷所 國光印刷株式會社

著作權

發行所

東京市京橋區月島
東仲通九丁目四番地
東京市麴町區有樂町
三丁目一番地

神生クリエーション教壇
樂社

電話 本局二千〇九十五番
本局三千七百八十番

白木屋を見る

大賣出しの中頃十月十七日に、白木屋呉服店に行つて見た、増築工事成りたる白木屋、其外觀の美を著しく増したと共に内部の設備も大に改善された。第一に目に着いたのは、入口に整列して居る金筋制服のドーアボーイ(少年案内者)である、其上品にして而も寂しからぬ服装と快活なる態度とは、確に人目を惹くものがある。此ドーアボーイが渡して呉れる店内案内を手にして、店内を一巡も二巡もして見たが、現今に於ては、先づ理想的のデパートメントストアと言ふべきものであらう入口の左側に在る食糧品部は、白木屋の卒先兼業である。「白木屋みやげ」と云ふ菓子を買つて居るが、可愛らしい箱入りである。履物、足袋類、書籍部を巡覽して雜貨賣場に来ると、其豊富な陳列品には思はずより附くのである。二階には藤原式休憩室がある。純粹の日本式裝飾で其古雅な事は、東京の真中に此んな處があるかと思はしめる位である。三階に行くと、餘興室と、ヘンリー時代式休憩室と、食堂と、寫真部とがある、何れも完備した者である。殊に寫真部は新規經營のものであるから、其設備も頗る行届いて居る、技師は亞米利加に八年も居た加藤敬爾氏、背景は頗る新しひ物を用ひて居る。兎も角一小商店で買物をして、中食を喰つて餘興を見て、紀念に寫真を取つて歸れると云ふのだから、人波打つて入店者があるのも無理はない。(東都風俗生)

秋色漸く闌と相成候

十月一日より例年の通り

冬衣大賣出し開催仕候

本年は新柄格別多數到着に付一層盛大

に相催し可申候

よせきれ見切反物類は全部差換陳列いたし候

松坂屋



いとく呉服店

東京上野廣小路

西川光二郎先生著

惡人研究

四六判二百餘頁
定價金五拾五錢

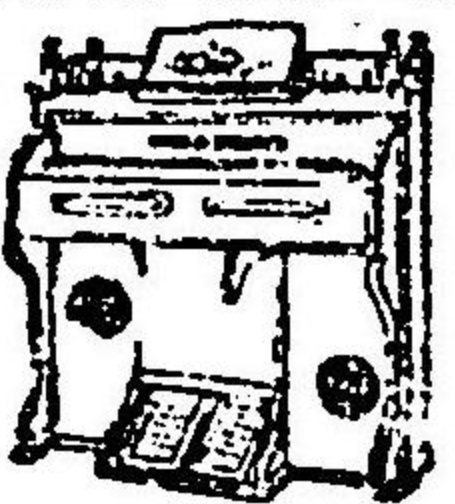
著者自ら序して曰く、「人をして先づ其本心に氣付かしめよ」とは余の本書に於て絶叫せる所のもの也。今の政治家と社會論者とは、是れを忘れて、枝葉の事のみ在意を勞しつゝあるものにあらざるか。今の教育家と慈善事業者も亦、外的設備と、枝葉の問題とに忙殺せられて、重きを精神に置くことを忘れたるやの觀あり。此の書は、人一度己と云ふ事に氣付かば、忽ちにして其人物一新し、何物と雖も之を防止すること能はざるを示して、此心機一轉と云ふことは、宗教家にとりても教育家にとりても、政治家にとりても、乃至は社會論者にとりても、其思索の中心たらざるべからざることを、談らんとして生れしものと知るべしと。

東京市麴町區麴町二丁目二番地

洛陽堂

振替東京二〇九一四番

音調正確



堅牢無比

オオルカ

家庭用
學校用
社會用

定價金拾八圓以上金參百五拾圓迄二十數種

樂器

ピアノ。バイオリン。マンドリン。ギター。手風琴。ハーモニカ。オルゴール。軍樂隊用樂器。紙腔琴大聲發音器。和洋音樂書類

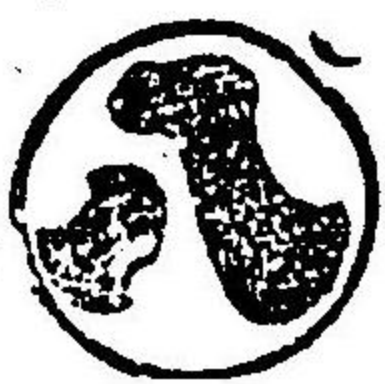
東京銀座三丁目

十字屋樂器店

登錄匠小判形容器入發賣



小判形器 定價金貳拾五錢



本家 松澤八右衛門

●取次所は有名藥店に販賣す

遠國送料 金貳錢
東京銀座三丁目四番地

(電京五三四番)

定價

- 金十錢 ●金廿錢 ●金卅錢
- 金五十錢 ●金壹圓

効能
 ●瀉車瀉船のるひ ●腹痛 ●水害下痢 ●頭痛 ●引風 ●寒さあたり ●中暑
 ●氣のふさがたるときは廿粒より卅粒を噛み碎き用ゆれば妙効あり
 ●常に此神仙万金丹を服せば水害あるひは悪き疾にかゝる患なしあり

東京五三 振替 三 五 警 醒 社 書 店 發 行 宗 教 書 橋 本 町 東 京 尾 張

松村介 不朽之道 (再版)

佛、耶、儒と云ふ如き有名の道
 を脱却して、無名の大道を説く
 定價五十五錢 郵稅六錢

小崎時 基督教の本質 (新刊)

教界の迷論今日より甚しきはな
 し本書の説く處は即ち斯教の眞
 相
 定價八錢 郵稅八錢

宮川經 人生の慰安

最近二年間の講壇より、人生及
 其解決に必要なもの廿五篇を
 收む
 定價八錢 郵稅八錢

松村介 修養錄 (廿二版)

大悟得道の奥底より説き起し、
 青年を警醒し治人救世經國に及
 ぶ
 定價四十二錢 郵稅六錢

住谷天 孔子及孔子教 (再版)

世の孔子熱に反抗し、孔子及其
 崇拜家を罵倒す。近來の快宥忽
 再版
 特價四十二錢 郵稅四錢

山路愛 基督教評論 (再版)

我國の基督教界を評するに、獨
 特の史眼を以てし、走馬燈の觀
 あり
 定價五十錢 郵稅四錢

牧野虎 新約聖書總論 (再版)

基督教の大典たる新約聖書の
 總論なり。斯教研究家の燈明臺
 なり
 定價二十圓廿五錢 郵稅十二錢

ツトネ 教會史 (再版)

基督教二千年の歴史を記述して
 學を指す如し。宗教研究家不可
 缺書
 定價十二圓 郵稅十二錢

資本金 參百萬圓
 積立金 七拾八萬四千圓

頭取 菊池長四郎
 支配人 吉田源次郎
 東京市日本橋區吳服町

株式會社 **東海銀行**

電話本局 二二三三
 八二〇〇
 八七六九
 一七〇九

本郷支店 赤坂支店 本所支店 京橋支店
 三田支店 淺草支店 堀江町支店

東洋大學 學講師 **高島平三郎** 下澤瑞世共著

心霊の 新研究

修養心理學講義

修養者の新福音

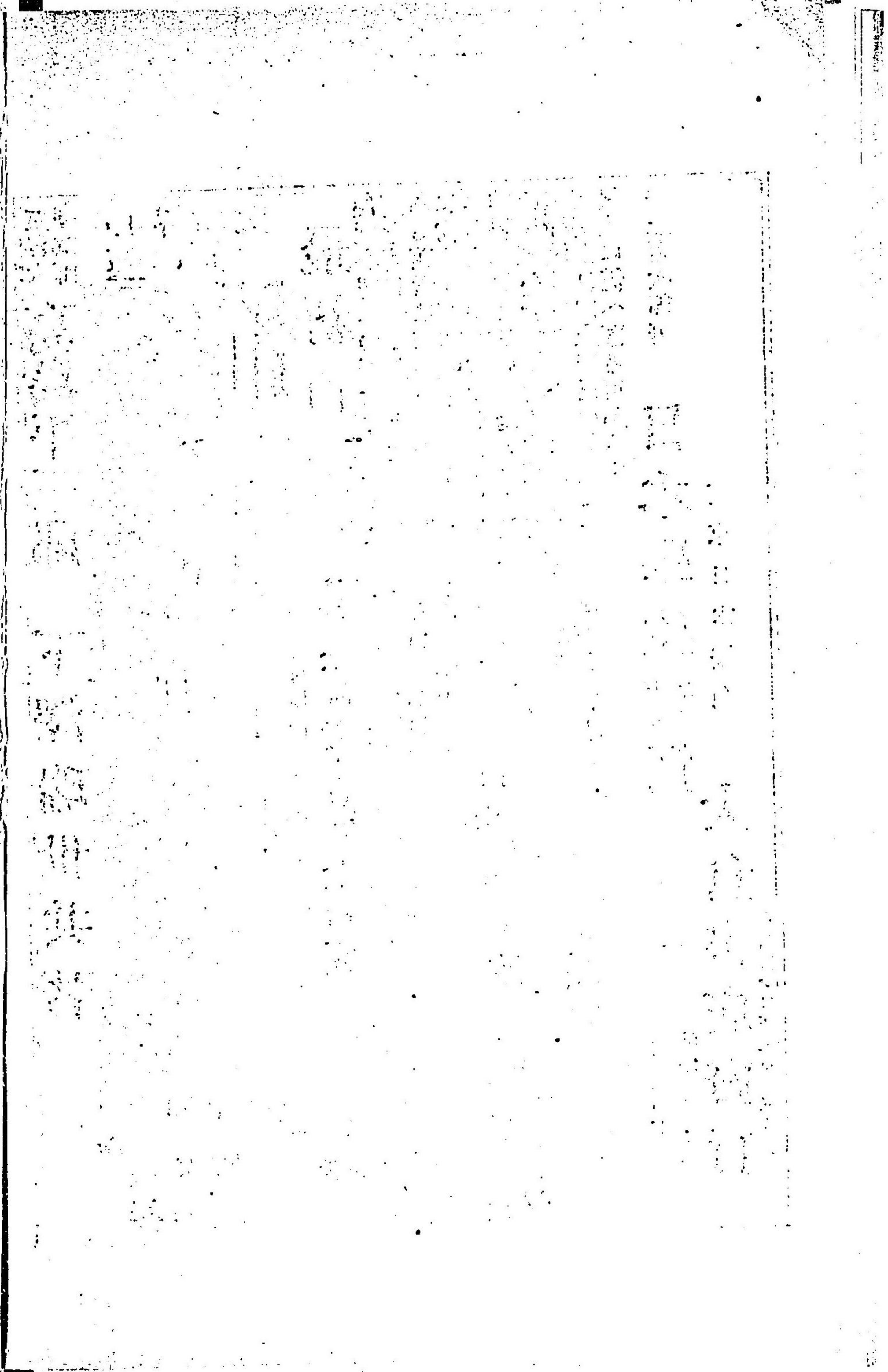
最新刊 菊判美製總ク 正價金壹圓七拾錢 郵金十二錢 稅

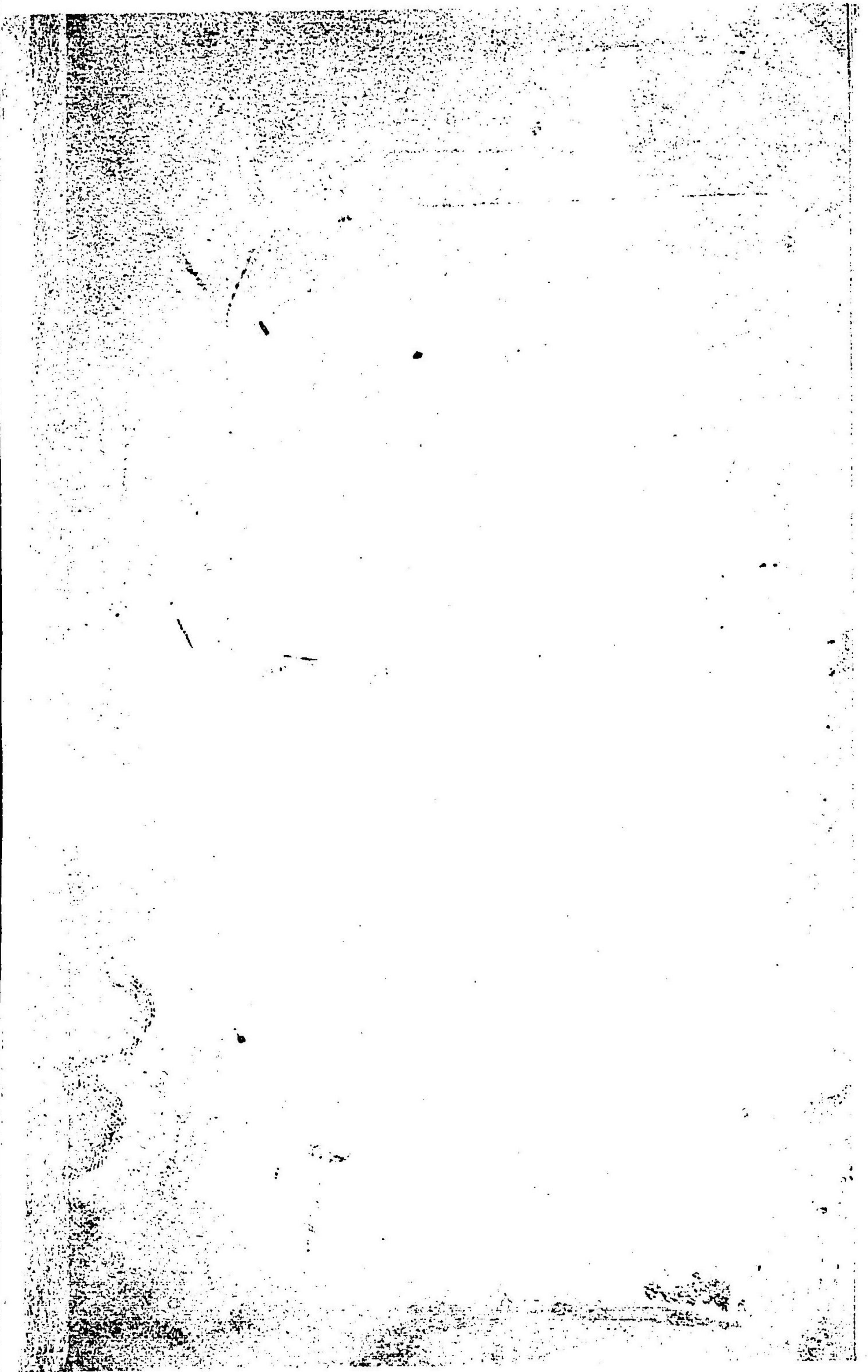
軌近心理學の著大なる新歩は向上發展の大事實偉大嵩高の英傑を科學的に究明する機
 運を齎しつゝあり此秋に方り多年心理學を專攻し夙に此興味ある活問題を精究する機
 ある著者は修養心理學の新興の文化の接合點たる我島帝國は方此の使命を果す
 に尙ほ未だ其例を見ざるものとる東西文化の接合點たる我島帝國は方此の使命を果す
 べきもの乎本書説く處より在來の漫然淺薄を包括せらる一大科學的體系なり
 非科學的なる修養論と全然異にし精神修養英俊武道精神
 神非凡 諸能本精神醫化等眞の科學問題の根本的意義發揮せらるる修養的科學的根
 帶築かれ向上發展の前途に一道の鮮光投せられん希望輝き雄心動く學生教官紳士諸
 机上に備へざる可からず

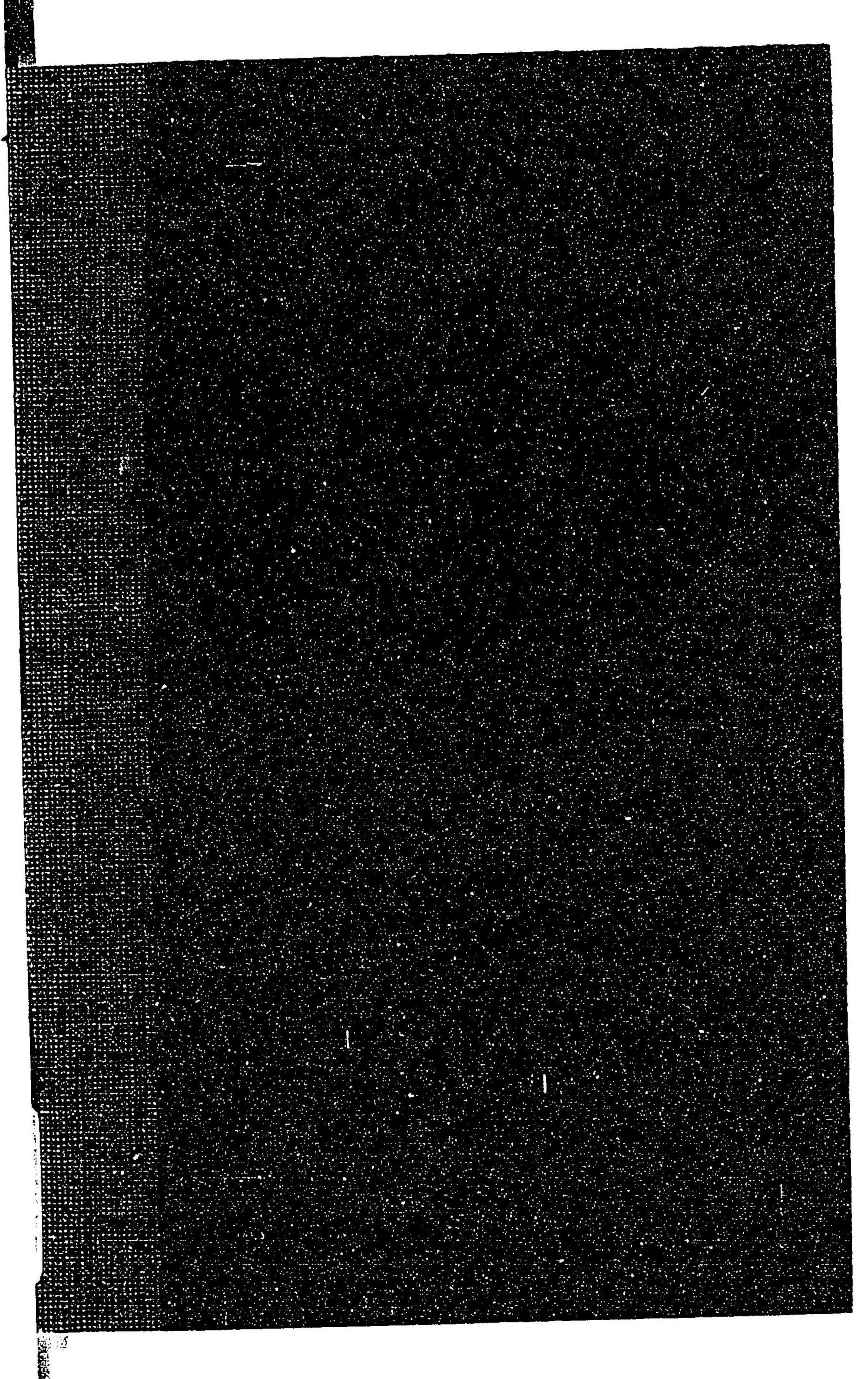
井上哲次郎著 **日本學生寶鑑** 總革全一冊 郵稅八錢 金一圓十錢

東京日本橋角 **大倉書店發行** 振替貯金口座東京二三八番

268
492







特18

469

クリエーション

国立国会図書館

020600-000-2

特18-469

クリエーション

宮崎 虎之助/著

M44

ABI-0415

